俳　句　雑　誌

水　明

2024　３月号

令和六年三月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十七巻第三号

《今月のかな女》

袴つゝみて使に渡す朧かな

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

夫・零余子が何かの会合で出掛けた日のこと。出先で袴が必要になり、使いの者がかな女の元に受け取りにきたのであろう。仲春の朧夜のことで、月も夜景も潤を帯びて艶めいている。風呂敷に包んだ袴を渡すかな女も同様である。何でもない日常の一齣なのであるが、「朧」という一言が常とは違った雰囲気を醸している。（鬼之介・註）

水　明

第1122号

―華の一句―

受付の笑顔とびきり冬の虹

新　暦　文

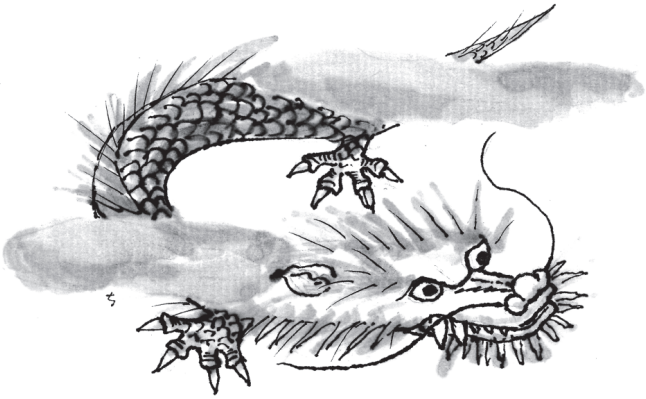
民間会社や公官庁など、何処の職場でも受付の人の対応がたいへん重要で、その応対ぶりによってその事業所の品格が判るといっても過言ではないと思う。特に、笑顔でてきぱきと応対する女性の受付係に出会うととても嬉しくなる。掲句の作者が、とびきり笑顔の素敵な受付嬢に応対されたことがあるのだと思う。筆者も新入社員の頃、得意先で同様の経験をしており、作者の気持がよく理解できた。

（鬼之介・推薦）

水明

令和６年
３月号

今月のかな女　1
華の一句　山本鬼之介　4
灯籠の雪（作品）　大村節代　6
コンサート（近詠）　菊池ひろこ　7
黄落（近詠）　五明昇　8
百尺竿頭　主宰作品の鑑賞　檜鼻ことは　10
ゆずり葉　季音月評　12
季音「雪」（同人作品）　由良ゆら女　石井喜恵　網野月を　ほか　12
季音「月」（同人作品）　高島寛治　松宮保人　大場順子　ほか　19
季音「花」（同人作品）　檜鼻ことは　保坂翔太　曲淵徹雄　ほか　24
『水明誌』を繙く　石口栄　29
現代俳句鑑賞　網野月を　30



二月号の巻頭句　32
俳誌望見　染谷風子　33

水明集　西幅公子　清水桂子　池田珪子　ほか　34

水明集作品評　山本鬼之介　46
水琴窟（水明集一月号鑑賞）　池田雅夫　50
鼓笛集　52
句集喝采　曲淵徹雄　55
山紫集　56
新春俳句大会の記　正木萬蝶　62
水明例会報・各地句会報　64・66
全国大会のお知らせ　71
春の吟行会のお知らせ　72
風声・発展基金御礼　73
後記　74

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

灯籠の雪

山本鬼之介

立春大吉頼もしきかな實母散

薪割りの音小気味よき早春

玉砕のことばの重み建国日

淡雪に雪見灯籠調ひぬ

土地つ子に習ひ公魚釣るひと日

ダンディに客員教授春の芝

銅像の人馬もろとも冴返る

フランスパンは立てて持つもの木の芽道

コンサート

大村節代

其方此方から春著の人の集ひ来る

歓迎の獅子舞出づる大広間

青きドナウで始まる新春コンサート

初春に錦織健の恋の歌

胸を打つバッハのアリア寒の内

ペンライト揺るる会場冬薔薇

冬灯余韻にひたる帰り道

音楽に造詣の深くない私だが、昔から新春コンサートには出かけていた。年初の音楽会は、今年もという気持が沸き上がり好きだった。だが、ここ数年は出不精になって引き籠もっていた。しかし昨春、東京フィルハーモニーのコンサートに久し振りに出かけた。楽しく気持良い心地での帰りに、渋谷駅前の大雑踏にびっくりして、二度と新春コンサートは無理だと思った。

ところが大宮駅近くに新ホールが出来て、ニューイヤーコンサートに、昨年聴いた東京フィルがあちらから来るというので、こりもせずに出かけた。帰りも、ひどい雑踏もなくほっとした。

黄落

菊池　ひろこ

黄落へ青き炎のごと佇てり

予知夢に似たる無音や木の実降る

補聴器へ風音となる天の川

誤報みな一網打尽鰯雲

時刻知るため時計台見る愁思

看護師の背後にかかり秋の虹

新市場（ブルーオーシャン）とや晩秋の掲示板

大学の学科の学務事務をしていた時のことである。進学してくる後輩に向けた在学生からの「注意事項」を見せてくれた人があった。曰く「事務の菊池さんには気をつけよう。あの人に睨まれると空気も凍る」。つまり、「自分たちの成績を全て知っている人」という意味らしかった。無論、事務官が学生の成績を他へ漏らすこともなく、「改ざんする」こともできないシステムになっている。現在は世のために活躍しているであろう彼等の度を越したジョークを思い出すと笑いを誘われる。

大学構内は、見咎められることなく誰でも散歩することができ、私も時折立ち寄る。仕事をやめて何十年にもなるが、学内の四季の移り変わりを時折作句の材料としている自分に気づく。

百尺竿頭

◎主宰作品の鑑賞

五明　昇

十二月号

張りぼての釣鐘鳴らす村芝居

農村を中心に、村人自身が演じて楽しむ村芝居（農村歌舞伎）は全国各地に伝承され、玄人顔負けの名演技が観衆を唸らせる。釣鐘などの芝居道具には、竹や木で作った骨組みに紙や粘土などを貼りつけた張りぼてが活躍するが、安珍清姫伝説の後日談である「京鹿子娘道成寺」に使う大釣鐘などには、見事な出来栄えの逸品が登場する。

秋江や花嫁舟の復活す

白無垢姿の花嫁が手漕ぎのサッパ舟に乗って新郎の元に向かう潮来地方の「嫁入り舟」は昭和三十年代半ばに幕を閉じたが、その後「水郷潮来あやめまつり」のイベントの一つとして復活し、観光客の人気を呼んできた。近年は秋のブライダルシーズンに合わせた「夫婦舟」も運航され、水郷地帯にかつての風情が戻りつつある。

霧の浜町江戸と覚しき常夜灯

江戸時代の日本橋浜町は大名屋敷や蔵屋敷が立ち並ぶ武士の町であったが、明治維新後は格式ある料理屋や飲食店を舞台に華やかな料亭文化が華開く地となった。その後関東大震災や東京大空襲で壊滅的な被害を受けたが、今では新旧の魅力が入り混じった魅力ある街並みに生れ変わっている。狭霧立つ浜町、路地奥の常夜灯に昔を偲んだ一句。

念力で探す松茸きのこ山

松茸はアカマツ林に発生する日本のきのこの王様で、高価な食材として珍重されている。松茸が生える山林は「マツタケ山」と呼ばれるが、発生の場所を知らない人間がやみくもに探しても容易に採取できるものではない。マツクイムシによる松枯れや地球温暖化の影響で収穫量も年々減少しており、松茸採りはまさに念力に頼る他ない状況である。

初冬や鳩飼ふ家の朝の音

郊外を散歩していると、物置やベランダの高所に設えられたレース鳩（伝書鳩）の飼育小屋を見かけることがある。放鳩地から飼育地までの飛翔速度を競う「鳩レース」は人気が高く、愛鳩家の家からは朝早くから放鳩訓練の音が聞こえて来る。張りつめた寒気の中、大空を翔る鳩の群れは爽快だが、近隣からは飼主に一層の管理規制を求める声が聞こえる。

一月号

小夜しぐれ竹人形をつくる家

越前竹人形は、全国有数の雪国である福井県の伝統工芸品である。厳しい寒さに耐えた真竹や孟宗竹を使い、竹の持つ直線と曲線の美しさをそのまま取り入れた人形には能や歌舞伎、踊りや風俗などが情感豊かに表現されており、郷土出身作家、水上勉の『越前竹人形』によってその名が全国に知れ渡った。現在では坂井市の「越前竹人形の里」で製作・展示が続けられ、見学者の製作体験にも人気が集まっている。

燗酒や座布団背負ひ隠し芸

「逃げた女房にゃ未練はないが、お乳ほしがるこの子が可愛い～」、一節太郎の往年の名曲に再会したのは、水明に入会した年の全国大会前夜祭。受賞者の一人が二つ折りにした座布団を帯紐で背負ってこの歌を熱唱、出席者からやんやの喝采を浴びた。全国大会での受賞者の隠し芸披露は水明の伝統で、玄人はだしの名作の数々が口伝てに語り継がれている。好物の燗酒を前に、往時を偲ぶことしきりである。

琺瑯引の「鹽」の看板空つ風

地方のレトロな町並みなどで見かける「塩」という琺瑯引看板にはそこはかとない郷愁が漂う。我が国が塩の専売制を敷いた一九〇五年から九七年の間、許可を得た商店がこの看板を下ろして販売していた。琺瑯引きはブリキなどの金属にガラス質の釉薬を高熱で焼き付けたもので、かつては屋外広告や店頭表示として広く普及していた。旧字体の「鹽」と上州名物空っ風との取り合せの妙が光る一句だ。

その景色秘めたる雪見障子かな

雪見障子は上部に障子紙、下部にガラスを使用し、ガラスを通して外の雪景色を眺められることから名付けられた。採光性が高く、障子紙で日差しを和らげつつも下部のガラスから適度に光が取り入れられ、和の情緒あふれる風景が楽しめる。家の中でゆったりとした時間を過ごしながら、外の季節を感じられる雪見障子は、その秘めたる部分にとりわけ風情が味わえる建具として古くから日本人に親しまれてきた。

序の舞の摺り足潜む冬座敷

「序の舞」は能の舞事（まいごと）の一つで、舞始めに「序」という導入部のある静かで典雅な舞のこと。面や装束を付けずに舞だけを演じることを「仕舞（しまい）」と言い、上方ではかつてお稽古事として流行していた。女流画家上村松園が「私の作品の中でも力作」と言う『序の舞』に描かれているのは、扇を手に仕舞を披露する良家の令嬢である。障子を隔てた冬座敷から序の舞を復習う摺り足の音が洩れ聞こえてくるような一句。

ゆずり葉

◆季音一月

檜　鼻　ことは

張りぼてのべこが首振る紅葉窓　　茂木和子

いつのことだったかは忘れてしまったが赤べこ作成の様子をテレビの映像で見たことがある。木の型に和紙を張り、赤の下地に絵付けをして作られる。会津地方では病にかかっても重くならないようにと子どもに赤べこを贈る風習があったのだそうだ。

今では、厄除けのお守りや縁起物として人気の郷土玩具になっていて、首がゆらゆら揺れる姿がとても愛らしい。

そんな赤べこが傍に置かれた紅葉窓のある館、いつまでもそこに佇んでいたくなるような情景が浮かぶ。句のもつゆるやかな空気感に浸りその景色を楽しませてもらった。会津はまだ訪れたことがなく只見線に揺られて奥会津の旅をしてみたい。できるなら紅葉の頃に。

石蕗の花独りの姉の暮らしぶり　　野口和子

独りで暮らす高齢者の数は年々増える傾向にあり、その七割近くが女性の独り暮らしなのだそうだ。自由を楽しむことができる一方、高齢ともなると災害や急病など、いざという時の不安をぬぐうことができない生活。

石蕗の花、私の住んでいる所では十一月の中旬から下旬に咲き出す。だから石蕗の花が咲き出すと「そろそろ雪も近いな」などと思う。どちらかと言うと半日影を好み、可憐で美しい姿ながら、寒さには強くたくましい花である。それ故か、石蕗の花の花言葉は「困難に負けない」「愛よ甦れ」。

作者の姉上のことはまったく存じ上げないが、丁寧に日々の生活を営んでいらっしゃるのではないかと想像する。「ゆるいつながり」を大切にされ、お元気な暮らしを続けられますように。

当世風焼芋売りの名調子　　原田秀子

「当世風」の措辞に魅かれてしまった。石焼芋は江戸時代からあり「九里よりうまい十三里」と言われ、江戸から十三

里の距離にある川越の焼芋が人気を博したとのこと。

時代は変わりリヤカーを引くおじさんの「石やぁぁきいもぉぉ～　おイモ」の名調子が聞こえてくるとこれはもう買わずにはいられない。昨今では焼芋に使われる芋の種類も増えて、定番の「紅あずま」や「なると金時」に加え、ねっとりとして甘みのある「紅はるか」や「安納芋」なども登場し、焼芋ファンにとっては楽しみ倍増である。リヤカーに変わり軽トラを改造した屋台販売に加え、スーパーマーケットや専門店でも販売されるようになった。

でもやはり、遠くまで通る焼芋売りのおじさんの名調子が聞ける屋台の焼芋を買いたいものだ。

一日一本能登は時雨て路線バス

渋谷きいち

「金沢から羽咋までが四十五分　羽咋で北陸鉄道能登線に乗り換える　それより三明までは五十分とのこと　三明でバスに乗り換え…」映画「ゼロの焦点」の禎子の独白である。

今では羽咋から三明に続く線路は廃線となり、映像の中にその姿が残るのみ。能登半島の冬の海は荒れ、船便も滞る。当時、奥能登の発展には鉄道が必要と三明からさらに北への路線が計画されていたのだそうだが、軟弱な地盤に工事は難航、資金も尽きてしまい中断されてしまったとのこと。

映画ではヤセの断崖に立つ禎子の姿が映るが、その断崖も平成十九年三月に起きた能登半島の地震で断崖の先端部が三十メートル以上崩落してしまい当時の姿はないと聞く。日に一本、能登の生活を支える路線バスに乗り、時雨の能登を行く冬の旅、旅情豊かな一句である。

正月早々に起きてしまった能登半島の大震災、復興には多くの時間を要することと思うが、平穏な日々が一日でも早く、能登に訪れることを願う。

秋惜しむ地の塩となる余生かな

日高道を

「時危うくして偉人を思う」という言葉を想起した一句。ここで言う偉人とは、立派な地位にある人という意味ではなく、一国の良心ともいうべき人のことであり、市井にあって良心にしたがい大地の塩となって力を尽くす人のことだと教えを受けた覚えがある。

「地の塩」は説明するまでもなくマタイによる福音書　五章一三節にあり、目立つことはなくとも人や社会のために働くことの尊さを説く言葉。現役時代、第一線で活躍されていたころからも地の塩として社会に貢献されていたのだと思うが、第一線を退き第二の人生を営んでおられる現在、あらためて地の塩としての生き方を自分自身に問われている。「秋惜しむ」の季語が、これまでの人生を振り返りつつ、大仰にかまえることなく自然体でこれから生き方を自問自答されている作者の姿を投影しているようだ。

季音雪

正月

由良ゆら女

鶴髪の溺るるばかり初日影
日捲りは月日の重さ雪もよひ
瑞雲に吼えて正月いかのぼり
遠き世の唄ほろ苦し初神楽
面白や骨正月の鯛の鯛

聖山界隈

網野月を

枯木立チャペルの白を衛りけり
野の石を抱き枯れゆく葛かづら
日向ぼこ五つ七つの鳥の声
冬うらら池に噴水らしきもの
枯芝の覆ふ頂人を避く

龍の口

石井喜恵

晦日そば下宿で啜るカップ麺
淑気満つ手水こぼるる龍の口
妻もまた下町育ち福寿草
松過ぎの鱗のはぬる魚市場
寒禽や売地にひびく杭の音

鍬の柄　石山かつ子

田へこぼれ畑へこぼれて寒雀
まゆ玉を馬頭観音にも一枝
鍬の柄を挿げ替へてをり春を待つ
指立てて風よむ漁師寒日和
着ぶくれて置物のごと母御座す

榾火守　大橋廸代

広前の榾火守らのコップ酒
数独であそぶ白寿や福寿草
解析より幾何が大好き枯はちす
永生きの痛させつせつ初電話
初声にひくりと庭のさくら猫

手招く　大村節代

まなじりに富士せまり来る初電車
初天神拝(をろが)み露店ひやかせり
ゆつくりと餅花ゆるる京町屋
頭を被ひ楚楚と近づく雪女郎
手招くは神かサタンか雪女郎

めでたし　小倉倭子

極上や目頭熱く初日の出
初旅の日光結構東照宮
初詣辰年辰刻輪王寺
初神籤「吉」を導く鈴の音
一族の出揃ふ温泉三が日

翌檜　栢尾さく子

あすなろの枝に烈しき冬入日
友の訃に音なく坐る冬畳
冬座敷家霊の如し古時計
雪空の満目無音友逝けり
改年のただならぬ空火球とぶ

羽音　菊池ひろこ

人日や袂を振れば羽音めく
初刷に水攻め火攻めありしこと
門松の天指し老舗代替り
箸高く上げみる弱気闇汁会
サイレンの近づいてくる闇汁会

去年今年　五明昇

一陽来復身の錆落とす湯治宿
宵越しの社務所に届く晦日蕎麦
機嫌よき浅間小浅間年明くる
禅林に淑気揺るがす魚鼓の音
エスカレーターに読点を打つ春小袖

困民党の境　延昭

困民党の駈けし秩父の山眠る
屋敷のあとに建売四戸初鴉
松飾る華道宗家の表門
福寿草庭に苔むす石の臼
青春の詞華集まぶし竜の玉

冬

椎野 美代子

冬桜ふたつ耳朶微熱いろ
いつどこで媼なりしか姫椿
今以て四人きやうだい福寿草
朝影を微細にはじくシクラメン
葉牡丹の大渦あふる夜の地震

御年酒

島津 初花

御年酒の金杯に浮く菊御紋
手水鉢に光波うつ初景色
糸繰機は倉に老いしや年新た
濁酒を白湯呑むごとく冬満月
初鴉築百年の鬼瓦

今朝の春

鈴木 康世

初茜窓を過りし二羽の鳩
吾が顔に母の面影初鏡
擬蟷螂壁に来てをりお元日
三鞭酒で長寿祝はる今朝の春
正月の凧に夢描く兄いもと

初日

田寺 玲子

初日さすおのころ島へ渡る橋
松飾る八万石の角櫓
大漁旗門渡しづもる漁はじめ
波立てず航くタンカーや冬夕焼
はせを句の床に静もる冬座敷

考へる人　十倉和子

雑煮食ぶ停戦なき地をうれひつつ
三日はや黒潮市場の鯛の粗
風花の雪へとかはる峠口
寒夕焼ムンクのやうに叫びたし
考へる人置くウインドー日脚伸ぶ

春ほのぼの　鳥羽和風

鶯餅若草色の茶を啜る
薄氷陽を待つ寺の手水鉢
せせらぎが和音奏づる猫柳
天に鳶浦辺の風にいかのぼり
折鶴に息吹き入るる鶴帰る

うすくれなゐ　永野史代

室咲きのうすくれなゐの鉢を愛で
寒禽の枝に集まる日和かな
「私卒寿よ」声高らかに初電話
すでに筆走らせる顔初句会
初みくじ吉と出て足軽やかに

三が日　波多野寿子

庭石の見ゆる座敷や琴始
元旦の地震におののき娘に縋る
曾孫と語る楽しさ三が日
降りに降る水雪のさま見てをりぬ
淑気満つ師の掛け軸の整然と

年立つ　星野和葉

駅伝に人生いろいろ三日かな
店頭に七草奥に招き猫
松過の松の置き場に落ち着かず
鏡開ころり転がる餡の餅
餅花や力士の手形力みたる

餅花　茂木和子

餅花揺れ猫の遊びを誘ひけり
餅花に触れて後れ毛ととのへり
餅花や父の器用さ今思ふ
初天神からから絵馬の数知れず
初天神かるき寄り道船橋屋

踊る阿呆　森本早苗

初旅や踊る阿呆に成り済ます
瞑想に耽る樽風呂初烏
浜焼の牡蠣宮島へ爆ぜたがる
買初のお洒落な帽子時刻表
異国人墨染衣雪催

新年　矢作水尾

年新た進水式の祝辞かな
一湾を華やぐ船旗初日の出
出港は末広がりぞ漁始
大鍋に伊勢海老踊る浜料理
冬日和秩父稜線端整に

風花　山中みどり

冬うらら厩橋東詰の地蔵尊
風花や墨堤を行く人力車
潮止る大川駒形の百合鷗
雪になる気配くぐもる街の音
初雪や一閃の雷伴ひて

夕日燦　柚木治子

松過やなほ威厳ある長屋門
うつし世を笑み一すぢに寒椿
白銀にたましひのやう寒椿
枯原を切りて木道空に消ゆ
落日に一瞬赤き枯野かな

特集　俳句と前書き
巻頭作品10句
岩淵喜代子・尾池和夫・鈴木太郎
千葉皓史・田口紅子・中原道夫
篠遠良子・山西雅子

俳壇
4月号
3月14日発売
定価900円（税込）
巻頭エッセイ
対中いずみ
八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句［第Ⅳ期］……朝妻　力・村上喜代子
新連載
幕末・明治の俳句……秋尾　敏
知ってるようで知らない俳句用語……井上泰至
名句のしくみと条件……坂口昌弘
私の本棚・私の一冊……日原　傳
連載
十二か月添削教室……前北かおる
俳書の森を歩む……栗林　浩
俳句と随想12か月　石井いさお・宮谷昌代

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

季音月

初春　高島寛治

見沼田の淑気の中を駆け抜ける
美しき老いでありたし福寿草
淑気満つ走り根太き杉並木
エレベーター一家で乗り込む今朝の春
初春や鳩は胸から歩き出す

花の春　大場順子

初春の光ついばむ水の鷺
家族得て踏み出す一歩花の春
闇汁やこつそり垂らす惚れ薬
落ち際のくれなゐきらり寒椿
松明けの港出てゆく郵便船

初山河　松宮保人

箸で食むガレットの店山眠る
新雪や朝刊来る靴の跡
降り立てば灯火は暗し雪風巻
吉兆や静かに明けし初御空
インターのある鳥羽谷や初山河

歌がるた　森川義子

金粉酒祝ふ華甲の明の春
毬のごと弾む少女や歌がるた
寒波来て軋む身内の蝶番
堂堂として裸木の気骨かな
追越せば他人の空似冬帽子

待春の調べ　梅澤佐江

闇汁によもや烏賊墨とは儘よ
伊勢海老の全き赤や祝ぎの膳
恋の息吐くや煌めく氷面鏡
蹲踞にひとひらの紅初氷
待春の雅楽の調べ花燭の典

歌がるた　近藤徹平

歌がるた一瞬早き華奢な指
師範代の組手披露や初稽古
冬萌やビルの谷間の不動尊
寒日和荒川を発つ練習機
寒卵シェフは手練の片手割り

初御空　井上玲子

噴煙は太古の息吹年迎ふ
初御空指呼に立つ富士父性めく
裸木の神木威容ゆるぎなし
初明り磨き上げたる大玻璃戸
晨光の広がるさ庭年新た

寒の水　井上燈女

香煙のここより内陣初詣
凍て鶴の身じろぎもせず吹かれけり
寒木瓜や刻を急がぬ大時計
寒の水わが立つ厨指定席
雪しんしん声のくぐもる独りの夜

新年の景　正木萬蝶

馬手に吾子弓手に神と初詣
喰積のとつちらかつて冷蔵庫
七種の一つが足らぬ今朝の粥
闇鍋やくちづけよりも柔きもの
ゲレンデにゐてこそ夫の男振り

「夢」の一文字　丸山マスミ

牡蠣雑炊にはか厨の実験室
茄子紺に衿を正せり初筑波
投込寺に浄土の光福寿草
闇鍋に乗り出す膝と退く膝
掛軸に「夢」の一文字淑気満つ

日をめくる　松井由紀子

青み添へ五彩ゆたかに雑煮椀
地震ありと筆圧つよく日記始
菜粥食ぶ七つの種を諳んじつ
松過ぎや雲足はやく昏るる街
針孔さぐる糸おぼつかな寒灯

初景色　山田美佐尾

碧天に真白き城や初景色
宝船来さうな海や初景色
初景色人生かけた襷継ぐ
伊勢海老の朱色めでたくあざやかに
氷上や楽(がく)に合はせて美女の舞ふ

梅一輪　池田雅夫

春立つや歳相応の薄化粧
早春やいざ暁光の港町
梅一輪誉めて頷く武骨者
くすぶりし一叢野火を煽る風
街角の日陰に巣くふ余寒かな

なづな粥　渡辺舎人

かぎろひの光たる尖り去年今年
松過ぎぬ地震が夜闇を剥き出さす
年新た直路ばかりの我が山河
椋番ふ寒を嫌ひて押し合へる
二薺のみどり走らす漆器かな

しがらみ　町野広子

物言ひの母に似る姉晦日蕎麦
家族てふ小さきしがらみ晦日蕎麦
週末の身一つで乗るスキーバス
朝寒や小指ぶつける椅子の足
伏す母の目線辺りに室の花

採氷夫　大塚茂子

不忍池ビルの谷間の浮寝鳥
朝日浴びぷかりぷかりと浮寝鳥
過ぎし事みな透明に雑煮食ふ
冬萌や秩父連山こむらさき
岩だたみ影を背負ひて氷採る

七日粥　荒井倶子

柚子風呂に五体の捻子がゆるびだす
コンサートの余韻をさらふ空つ風
寄り添うてみくじ見せあふ春着の子
地震の地に思ひ馳するや七日粥
寒梅や肩を寄せあふ女坂

都鳥　藤澤喜久

生粋のスカイツリーや都鳥
浮世は夢と色無き世界へ雪女
読み止しの本と眼鏡と暦果つ
人逝きて百箇日や寒茜
埋火や九十余年の断捨離中

女正月　上戸千津子

神苑の句碑に頷き初詣
共に老い共に笑ふや女正月
火の鳥となり注連飾舞ひはじむ
寒月や心かき立つ友の文
元朝の仕来り我で終りとす

暁光　内田恵子

先頭は水明の旗冬桜
暁光に頸伸ばす馬淑気満つ
寝正月間近に故山迫りくる
昼光の初湯女神の心地して
果実酒の土蔵に並び餅の花

見知らぬ人　福田千春

闇汁やひとり見知らぬをとこをり
白鳩の群れ旋回す初御空
猿回しの猿に二歳児見下され
闇鍋の勇気試さる箸蓮華
水仙をかかへ地震の地悼みをり

裏白　熊倉千重子

お元日能登激震に胸ふるへ
明けの春金閣揺るる池の面
裏白のちぢれ具合も目出度くて
さあ開けむ胸の高鳴る福袋
キャッチボールの父子が会話す枯野中

庚申様　松本光子

庚申様に祈る術後や寒の入り
初句会喉を潤す吟醸酒
明神詣り蕎麦みそ買ふも神の留守
寒風に梢(うれ)のあけくれ尖りたる
赤のれん寒菊ほほと肩で押す

日めくり　野口和子

日めくりの厚き一枚初暦
大吉も凶も一興初神籤
読初や久々に買ふ単行本
犬遊ぶ玩具の音に雪催
鴉にも美声悪声冬ざるる

淑気　松山清子

手水舎の龍の口より淑気かな
月並な日々こそ大事初日記
駅伝に肩入れをして三が日
筋トレに励みし今日の寒卵
頬よぎる風おだやかに春隣

初雪　西浦千枝子

里山の未舗装の道梅つぼむ
ライト浴び舞ふ初雪の風情かな
干支編みて心すつきり年迎ふ
これ以上望まぬ暮し飾り海老
年男福ざさかつぎ夭夭と

一月　川崎道子

初御空ヘリコプターが楽しげに
一月や襞目際立つ巫女袴
ハイヒール響く地下道寒の入り
寒見舞深く手を入れ投函す
横文字の新居の表札春隣

❖原稿募集

季音（雪・月・花）五句　（巻末添付用紙）
水明集　五句　（　〃　）
山紫集　一句　（　〃　）
鼓笛集　三句　（編集部より依頼のあった方）
※二百字詰原稿用紙使用。
水明通信・随筆等自由にお送り下さい。
原稿締切　毎月二十五日必着
原稿宛先　水明俳句会　編集部
〒330―0064　さいたま市浦和区岸町四―一〇―二一

季音花

初天神　檜鼻ことは

大雪の朝に急ぎと言ふ電話
石一つ投げて家路へ冬の川
ねんごろに買ひ込む酒や年の内
初天神袂に仕舞ふ小銭入れ
家ありて待つ人ありて雪明

軒つららー　曲淵徹雄

冬霞一声残しゆく鴉
背後から雨戸繰る音暮早し
育てては氷柱を舐むる朝の月
軒つらら藁打つ音は空耳か
乗りのよき双子姉妹の寒ざらへ

男坂　保坂翔太

空風を牛久大仏受けて立つ
帰り花老いても登る男坂
讃美歌のあとの沈黙聖夜かな
冬銀河未来を語りあふ茶房
振袖を整へ除夜の鐘を聴く

氷見の宿　横山君夫

磴のぼる一段ごとの淑気かな
鳴龍の声賜りし今朝の春
寒椿かたくなに紅握りしめ
卒寿とも見えぬ歩速や花八手
鰤しやぶの脂さばしる氷見の宿

初景色　渋谷きいち

那須の五峰が静かに揃ふ初景色
城跡を巡る褒美は梅早し
寒林にけばい女が泣きに来る
優勝逃す力士の肩に冬の蠅
櫟の寒林探れば山親爺

寒椿　染谷風子

債鬼なぞ恐るに足らず年忘れ
歌垣の謂れの山よ春近し
春芝居通が占めたる立見席
冬萌や十五の恋は仮免許
寒椿活けて写経の四畳半

水仙花　石川理恵

闇汁や武家の裔また公家の筋
戦火止むことのなき街去年今年
をさな子も一人前の雑煮椀
淑気満つ歩行者天国の銀座
プライド高き女の弱音水仙花

新たなる　青木鶴城

初凪や水脈曳く漁の船もなく
水仙や楷書の筆のすくと立つ
大寒にただ黙黙と人の群
酒蔵に響く唄声大氷柱
鮟鱇鍋五臓六腑に五つ星

新年あれこれ　日髙道を

初山河日本は地震（なゐ）の巣の上に
光年の旅路の果てや冬銀河
筆蹟の撥ねに勢（きほひ）の吉書かな
初句会曽て立体俳句論
沁み沁みと酒を歌ひて春を待つ

福寿草　野田静香

退院の眩しき風や福寿草
予報士の言葉に寒波乗り来る
早梅や皿に絵付の紅ほのか
電飾に魅かれ寄り道冬木道
深々と社へ御辞儀明の春

ほんのり赤く　河野はるみ

初鏡ほんのり赤く始まりぬ
猫飯を掻つ込み駆くる初出勤
出来立ての氷啄む野鳥かな
石くれも風も転ぶや厚氷
闇鍋や百三歳の姉の箸

初写真　笹本啓子

立ち上り嬰の一歩や初写真
ありたけの陽射しを背負ひ蝶凍つる
凍蝶のひと日放れぬ格子窓
冬の虹思はず願ふ幸せを
寒梅や宮にみくじの花盛り

始動　石田慶子

妖艶な女将の差配闇汁食ふ
闇鍋の異物ころがし舌競ふ
一人飲むめでたき皿にごまめ乗せ
買初はぶらり散歩のラムネ菓子
初めてのネクタイ渋目成人の日

御苑の松　下川光子

お手植ゑの御苑の松の淑気かな
足元の笑顔広がる福寿草
寄せ植ゑの中のぴかいち福寿草
願掛けは一つ七福神詣
吾の町の初めての路地福詣

春着　飛永鼓

除夜の鐘演歌の余韻引きつれて
白息を吐き独り言がんばろう
値札外す主婦の春着の割烹着
勢揃の春着収まる門の前
初乗りの幾つも揺るる御札かな

ぽつぺん　原田秀子

冬萌や掻き分けてみる杖の先
悴む手しばし徳利の燗に添ふ
ぽつぺんや素頓狂な音を出し
ぽつぺんを吹きて親しむ江戸の粋
ぽつぺんを吹きて愛らしおちよぼ口

お正月　鈴木玲子

初御空遠くに富士の泰然と
初電車金色靴のエトランゼ
正月の迷子放送こはるちゃん
黒豆を煮つつ映画を二日かな
誘はれて背広姿のスキーヤー

朝市通り　高橋　満耶子

元日や能登の地震に一変す
焼け跡の朝市通り雪時雨
手荷物の二匹の犬や初飛行
舟唄の八代亜紀逝き冬の雨
持ち寄りて新居に集ふお正月

明の春　宮﨑　チアキ

松過の玻璃に映えたる日の光
華麗なる富士の夕日や明の春
着膨れて星と語るや明日のこと
心より感謝の言葉明の春
心奥より祈る快復冬銀河

早世　松島　寛久

初空へ龍の字書いて意気高し
初句会一喜一憂す城子選
傑作を取らぬ面々初句会
大根やタカラジェンヌの足高し
早世に初雪の声星の声

伊豆爪木崎の野水仙　瀬戸　雄二郎

黒船に震へるばかり野水仙
沖を行く船は動かず水仙花
巌波の届かぬ処水仙群れ
水仙花美人同士は背きあひ
水仙花説教聞くときや横向くな

クリスマス　田中　章嘉

初春やスマホと暮らす親子供
若人の食べ歩く町クリスマス
アメ横の売り声交叉年の瀬は
故郷へ人の流れもめでたさよ
初詣焚上げに足とられけり

一番鮪　野村　美子

初市の一番鮪名店に
成人の日の華やかな輪や賑やかに
仏前に供へ挨拶寒卵
初春や生きゐることに幸思ふ
松の内能登の地震に肝ひやす

寒　卵　　野平美紗子

今年こそ幸めぐり来よ福達磨
庭に遊ぶめんどり鳴くや寒卵
今朝もまた目覚めて独り寒卵
カルタ取る子の嫁さんの手の速さ
凍蝶の陽当る水場に果ててをり

初写真　　葛城千世子

群れなして川辺に低き水仙花
本堂の花器に石詰め年用意
舞台よりマジックミラー声冴ゆる
喜寿祝ふ色紙の届く大旦
背比べ後姿を初写真

☆　☆

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2024年4月号

特集 春の料理帖～句をたずねる
○特別エッセイ～句を味わう+
「春の季語」を使った料理3選
榎本美沙（料理研究家）
○春の季語を使ったレシピ
草深昌子　伊藤伊那男　千々和恵美子
天野小石　野崎海芋

〈グラビア〉俳句界NOW 小杉伸一路

特別作品21句 堀田季何「楽園」

特別エッセイ シニアから人生を楽しむ方法
森嶋マリ（YouTube Marin's Single Kitchen）

北斗賞受賞者競詠
若林哲哉　川越歌澄　堀本裕樹
高勢祥子　涼野海音　藤井あかり
抜井諒一　西村麒麟　堀切克洋
諏佐英莉　藤原暢子　西川火尖
伊藤幹哲　佐々木紺

※セレクション結社「青海波」本城佐和

私の一冊 吉岡乱水「太白」

対談 佐高信の甘口でコンニチハ！
西谷文和（ジャーナリスト）

「俳句界」投稿欄 一流選者12名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

『水明誌』を繙く（水明一月号）

石口　栄（「鷗座」・編集長）

分校は今年限りや草紅葉　矢作水尾

今や日本が直面している大きな社会問題のひとつに少子化が挙げられる。少子化が進むと今まで普通に享受していた行政サービスを受けることが出来なくなり、また地域からは学校や病院が消える恐れが出て来る。まさに掲句の分校がそうである。

そしてこのまま少子化が進めば二〇四〇年までには全国の地方自治体の半数が消滅の危機に瀕する恐れがあるとのデータも出ている。分校とは学校において本校と分離して設けられる教育施設であり、かつては分教場とも称されていた。筆者の小学生時代の一学年は一クラス四〇名で六クラスほどであった。所謂団塊世代に相当する。小学校の分校は全学年合せて五〇名ほどだった。分校の生徒は中学生になると本校に通い始める。春から秋までは本校へ、冬季は雪で通学困難なため寮生活になる。今はその分校も少子高齢化の波に押され廃校になった。分校のみならず村そのものが消えてしまった。作者は分校の無くなることを寂寞の思いで眺めているのだろう。中七の「今年限りや」の措辞に感慨深い思いが強く表白されている。そんな作者を草紅葉が優しく包み込む。

はらからが卓袱台囲みとろろ汁　落合和枝

とろろ汁と言えば静岡市駿河区にある郷土料理店の丁子屋が有名である。丁子屋は慶長元年（一五九六年）に創業。江戸時代から四〇〇年続く静岡で最古のとろろ汁店である。筆者も吟行で一度訪れたがなかなか趣のある茅葺屋根で当時が偲ばれる。東海道二〇番目の鞠子（丸子）宿で松尾芭蕉は「梅若菜丸子の宿のとろろ汁」と一六九一年（元禄四年）江戸に出立する弟子の乙洲にはなむけとして詠んでいる。また丁子屋は歌川広重の東海道五十三次や十返舎一九の東海道中膝栗毛などでも知られる。自然薯は栄養満点でしかも消化が良いので東海道有数の難所である宇津ノ谷峠を越える旅人、越えて来た旅人にとっても貴重な栄養補給源であったと思われる。筆者もとろろ汁が大好きである。しかし自然薯に含まれるシュウ酸カルシウムの針状の結晶が皮膚に刺さることで手や口の周りが痒くなるので注意が必要である。掲句は丸子ではなく家庭でのとろろ汁と思われる。兄弟姉妹で卓袱台を囲んでのとろろ汁御飯。賑やかに談笑する家族、またその声が聞こえて来そうな明るく楽しい句である。

現代俳句鑑賞

網野月を

よろよろと歩く落葉を踏まぬよう　宇多喜代子
（『俳句四季』1月号・巻頭句より）

句跨りの破調で且つ文脈は倒置法である。「よろよろと」「歩く」「落葉を踏まぬよう」の部位は順番を異にしても句の意味は達成される。これが日本語の特徴なのである。作者はリズムから各部位の配置を考案したのだろうか。作者ほどの達観の心を得ることは考案することなく自然と句が案出されるのであろう。

飛びたちし初鳩もどり来たる幸　藤田直子
（『俳句四季』1月号・季節を詠む初鳩より）

「もどり来たる」鳩を認めた際に「幸」が「もどり来た」と思えた、ということであろう。「飛びた」った「初鳩」は、これも縁起の良いものだと思うのだが、そこに一抹の寂しさを感じていた作者は「もどり来た」ことに更なる喜びを感じ取ったのである。きっとこの鳩はオリーブの枝を咥えていたのに違いない。「初」に込められた思いが深い。

山のよく見ゆる日大根干しにけり　鈴木直充
（『俳句四季』1月号・冬来たるより）

山は自らをよく見せている。そんな日に大根を干したのである。冬の一日の景を簡潔に切り取りながら、作者自身の介在する景なのである。「……にけり」の完了の助動詞と過去の助動詞の複合が句の奥行きを表現している。

幻の湖の都の草紅葉　三浦亜紀子
（『俳句四季』1月号・湖上秋興より）

ファンタジックな句として解釈した。眼前に広がる「草紅葉」を見ているときっと「湖の都」にもこれと同じ「草紅葉」が広がっているだろうと思いを廻らしながら、湖の秋の趣を堪能されているのだ。「湖の都」は作者の創造の世界にあるのではないだろうか。他に「外来魚駆除ボックスも暮るる秋」がある。

形なきものより滅ぶ去年今年　井上論天
（『俳句界』1月号・新作巻頭より）

「形あるものより滅ぶ」は既視感があるのだが、この句は真逆な境地に至っている。そこは作者の強く思い入れしてい

る部分で、評者の云々する所ではない。ただ言えることは、「去年今年」という節目には、大きな世界観を語るのに相応しいということである。

木の実ふる旧き石みち徒のみち　鈴木しげを
（『俳句界』1月号・式部の実より）

「式部の実」全八句を見れば、多分、京都の景であろうと想像される。「旧き石みち」を歩めば、改めてここは「徒のみち」であったのだなあ、と思いを深くしているのである。中七と座五の「みち」のリフレインに心洗われる。他に「金剛流能の家なり式部の実」がある。

行く年と同じ歩幅で年きたる　高橋将夫
（『俳句界』1月号・姫始より）

「歩調」ではなく「歩幅」なのである。時間的感性ではなく空間的感性なのである。「行く年」という時間的概念を表現して、時空間がぴったりと嵌まっているように感じるのである。他に「去年今年遠ざかりゆく星たちよ」がある。

思ひ出は綿のごとしや去年今年　柿本多映
（『俳句』1月号・目出度くもありより）

先の掲句と同じく「去年今年」は人生に関わることを想い描くものなのであろう。作者にとって「思ひ出は綿」なのであるが、何かを「思い出の如し」と表現する場合もあるので読者が具体的に心に描く絵図は個々に様々なものとなるだろう。

弾かれしごとくに二人若菜摘む　今瀬剛一
（『俳句』1月号・初便りより）

「弾かれしごとく」は、野に出た二人の様子であると解釈した。二人が別方向に弾かれたとも解釈できるがそうではあるまい。一心不乱に二人ともに「若菜摘」みしているということであろう。「若菜摘」は、今では稀なことかもしれない。

俗塵は写さず弓場の初鏡　西村和子
（『俳句』1月号・流れ初むより）

「初鏡」はそれとなく日常とは切り離された感があるものだが、「弓場の初鏡」ならばその気分は尚更ではないだろうか。初弓の景であるが、化粧ではなく身嗜みの「初鏡」であろうと想像した。他に「老いたりと思ふ暇なき初鏡」がある。

地雷踏み一回休み絵双六　小川軽舟
（『俳句』1月号・幸ふ）

昨今の世相をどうしても思い浮かべてしまうのだが、「絵双六」であったならどんなにか安幸であろうかと思うのである。皮肉というよりも祈りにも似た願いが込められているように読める。

初仕事海を見たくて屋上へ　藤田るりこ
（句集『青葡萄』より）

句意を取るのに難解な句ではない。その分、ストレートに作者の意図した句意が伝えられてくる。そして、その句意の奥にある意味合いに思いを寄せることになる。ノーガードな句作りに共感する。他に「恋がるた好みの札を隠しけり」がある。

二月号の巻頭句

季音雪　日向ぼこ生きる証の爪を切る　柚木治子

季音月　美しき眼揃へて鰤の競り　高島寛治

季音花　月光に瘤包まれて冬木立　河野はるみ

水明集　肌寒や金沢過る二つ川　元田亮一

鼓笛集　ボーナスの知らせ劇団四季予約　吉川拓真

山紫集　だいこ引き山に斜めの噴火口　菅原卓郎

俳誌望見

染谷風子

「若竹」

二〇二三年十二月号　通巻一一〇〇号
主宰　加古宗也
発行所　愛知県西尾市

昭和三年六月、富田潮児を編集発行人として愛知県西尾で創刊。雑詠選者富田うしほ（創刊者の父）、金子刀水。平成二年九月、加古宗也が主宰継承。師系は村上鬼城。「誌名は、少年たちによって創刊されたことから鬼城が命名。」（角川学芸出版刊、俳文学大辞典より）。

本号は創刊一一〇〇号記念特集号で、「加古宗也俳句論」の題で、岸本尚毅、中村雅樹、黒岩徳将、安里琉太の四氏が寄稿し、現主宰の俳句を多方面より論じている。

巻頭の主宰詠「流水抄」五〇句より五句抽出

参道に箱ごと並べ蜂屋柿
吉良公が寄進の鐘や霜晴るる
四十七人の刺客義士の日とは笑止
義央忌済まば穭の枯れ急ぐ
裸木に耳当て生死確かむる

一句目、蜂屋柿は美濃加茂市蜂屋町産の渋柿を用いた干柿で、信長、秀吉、家康の愛した天下一品の高級品である。それが箱ごと参道に並べてあるとは豪勢である。どこの参道か想像するのも楽しい。二、三、四句目、忠臣蔵の吉良上野介義央は西尾市吉良の領主である。芝居では悪役だが地元では善政を敷いた名君として慕われている。吉良家の菩提寺の華蔵寺で毎年「吉良公毎歳忌」の法要が営まれている事を感じる。五句目、生命尊重の村上鬼城俳句が『若竹』に生きている事を感じる。

副主宰田口風子氏の「光風抄」十句より二句抽出。

燈火親しうしほ潮児の鬼城論
ユトリロの街はみな坂道冬隣

一句目、創刊者父子の熱く語る鬼城論は〝若竹〟に血肉になって今も生き続いている。二句目、ユトリロはフランスの画家でパリの市街風景を好んで描いた。日本でもファンが多い。作者のパリでの作品か。冬隣の坂道が印象的だ。

「若竹俳句賞受賞作家競詠」十四人一一二句より四句抽出。

秋声を聴くや遺墨の短冊に　荻野杏子
荒神輿ふどしの男よかりける　市川栄司
道すがら草の絮とぶ一揆寺　江川貞代
脱ぎすてる物ももうなき残暑かな　岡田つばな

「青竹集（同人自選）」十二人六〇句より三句抽出。

伊良湖岬差羽の渡る風を待つ　辻村勅代
毬栗や餓鬼大将の何処へやら　服部くらら
天高しどかと家康床机石　池田あや美

一読し、対象を確り捉えた骨太句が多いと感じた。鬼城と創刊者父子を論じた記事が幾つか掲載されており、師系研究に熱心な結社と拝察した。「若竹吟社」の発展を祈念する。

山本鬼之介　選

水明集

たたなづく穂高を跨ぐ冬銀河
過疎の村懐に入れ山眠る
薪の火に一服をして十二月
月山の上に弓なる冬銀河
初場所や廻しをさぐる左四つ

さいたま　西幅公子

あの家のじやじや馬娘空つ風
エンジンを吹かし七半空つ風
空を行く銀河鉄道山眠る
山眠る添ひ寝するかに山里も
不整脈を告ぐる主治医や冬の空

清水桂子

赤と黄の模様尽しに時雨かな
観音の裳裾の丹色秋深む
伊賀晴れて紅葉吹雪に佇みぬ
息白し女人高野に奥の院
風神の怒りの袋虎落笛

さいたま　池田珪子

慎ましく生まれ気ままな六花
冬うらら残る人生気負ひなく
隙間風窓から入り起こされぬ
諍ひの一言に黙隙間風
家のこと妻に任せて年用意

篠﨑紀子

鰐口を「こん」とひと撞き空つ風
眠る山木木に目覚し仕掛けたり
凍星や深山精舎の護摩祈祷
日向ぼこをみな弛まずストレッチ
浜千鳥ひと夜浮寝の波枕

伊奈　菅原卓郎

其の音に琵琶の調べを落葉踏む
万両の実房が十個たわわなり
秩父連山両手を広げ眠りをり
村はづれ雑木の山がぐつすりと
沈沈と温泉の街冬銀河

さいたま　山岸久美子

出征兵士送りし杜の帰り花
返り咲く場所のみ光集めたり
悔いのなき一日を過ごし冬至の夜
畑にある実家のみかん甘味濃し
七回忌法要無事に冬夕焼

杉戸　佐々木史女

ダム湖抱きハイカーを抱き山眠る
無沙汰の友と会へば少女に冬ダリア
諍ふも夫と連れ立つ年の市
十二月街は煌めき浮かれをり
嬉しきこと数へて眠る十二月

さいたま　菅原真理

ひそひそと囁くやうな冬桜
冬桜か細き中に芯を秘む
「考える人」見つめ考ふ冬うらら
小さき手のつかみ上げたる落葉かな
古戦場の枯野の一角いま公園

岡田宣子

露天湯へ渡るきざはし初時雨
満天の星の形見や今朝の霜
千両や粒揃ひこそめでたけれ
切れ長の御高祖頭巾の大年増
離れまで名入り提灯北時雨

小林京子

数へ日や巻き癖直すカレンダー
日の当たる高砂人形冬座敷
冬桜きつと私の応援団
傘かしげ霙るる橋にすれ違ふ
ウォトカのお湯割り濃い目冬の月

さいたま　元田亮一

気嵐をまとうて神の船のごと
陽射し浴び冬蝶やつと飛びたてり
古城従容供のごとくに冬の山
悴む手もて不器用に髪を染む
明け方の悪夢の余韻灯火冴ゆ

平塚　丸屋詠子

赤銅の殺気漲る寒稽古
被災者のプレハブに棲む隙間風
受付の笑顔とびきり冬の虹
会長の音痴馬鹿うけ忘年会
お開きは「同期の桜」忘年会

さいたま　新暦文

黒黒とただ黒黒と眠る山
粧ひを解き深深と山眠る
赤城より姉の叱咤か空つ風
沈菜漬ける在所の義姉や空つ風
関八州を搦め捕りたる空つ風

飯田忠男

光芒を享くる禅堂隙間風
残る葉の意気地助くる小春空
年用意外陣を占むる薦被り
亡き人へ先づは献杯忘年会
畏敬なる受胎の神秘星冴ゆる

さいたま　皆川更穂

冬の雲テントを畳むサーカス団
冬霞北山杉のそそり立つ
特選の乏しき投句春を待つ
冬霞墨絵のごとき新都心
鰤の糶吉報待てる漁師たち

反町　修

空つ風夜陰に山の声がする
ふるさとは行きも帰りも空つ風
米屋はや御用聞きかな十二月
白菜を漬けて一息日の終はり
啄木の歌碑の眼差し山眠る

越谷　阿部幸代

おほらかに隙間風入る大伽藍
縄のれん客と一緒に隙間風
千代紙の箸袋折る年用意
師の額を客間に飾り年用意
寒雷や車窓に哮くる日本海

さいたま　霜多光代

柏手に簪揺るる小春かな
暮し振りほのと匂ひぬ白障子
山茶花の咲き継ぐ里の校舎跡
山茶花や振子時計の診療所
ことことこと呼び塩少し小豆煮る

熊谷　越田栄子

帰郷するつひの住処ぞ冬銀河
のら猫に幾多の名あり日向ぼこ
止め腹の塩引き街道城下町
風呂吹を女将がそつと左党
枯芝に寝転び見たる丸き天

さいたま　梅澤輝翠

心して仏を拝む大晦日
短日や入り日大きく富士の山
短日や暗き道をば下校班
短日やいざ鎌倉か日が落つる
そびえ立つ穂高連峰冬霞

千坂平通

ミサイル飛んで来ませんやうに北塞ぐ
弟のちんちんいいな冬至の湯
陽だまりに犬の尿する開戦日
金平糖の王女に産毛聖夜劇
凝鮒鈴木真砂女のゐた銀座

森下山菜

老犬の遠吠え響き月冴ゆる
病室の窓に滲むや冬の月
置き配の隣の荷物師走かな
留守宅の軒先に置く冬林檎
古里に寒木瓜残し苑の母

さいたま　山戸美子

暮市や夫消え現るる鴉の如
日向ぼこ伸びて伸びきる猫の胴
着ぶくれの人が人呼ぶ中華街
近影のすなはち遺影冬桜
独り酌む熱燗父よ何に耐ふ

本橋稀香

蜜柑一個居室にあれば温かし
冬晴や眩しく滲む沼畔
冬晴や止め石の先鷗飛ぶ
滑滑と大黒柱光る冬
箱根路や友の背に乗る冬紅葉

寺町知子

木々に霜パスタに薄く粉チーズ
真白なる句帳を開く霜の朝
艶めきて二粒転ぶ実千両
山眠る驕れる者は眠れざりけり
「幸せか」涙で滲む聖樹の灯

綿引まりこ

落葉して稜線確と雑木山
落葉風カメラ地に向け空に向け
初霜や人無き尾瀬の一本道
不夜城を守る一羽の浮寝鳥
汽水湖の風に身を寄せ浮寝鳥

さいたま　森美枝子

木木映し風も無口に冬の水
白き鳥独り占めする冬の水
山茶花のほろりこぼれて千秋楽
亡き犬の見え隠れする山茶花に
山茶花に小さき靴下迎へ待つ

緒方みき子

忘年会探してしまふ人のゐて
鮪解体す団結する社員
帰り際三十秒の炉の出会ひ
大空や一つ限りの冬の星
牛肉を嚙む旨さかな冬ぬくし

吉川拓真

深更や獣のよぎる枯野道
少年の恋の始まり新松子
鯛焼を食べ終へ句会再開す
母無くて遠のく実家冬籠り
どの枝も冬芽つんつん光りけり

若狭　山﨑郁子

眠りたる秩父連山一望す
福望む手締めがひびく年の市
月が近づく明の明星冴ゆる朝
草野球枯芝に消えホームラン
枯芝に軽き足音夕陽射す

さいたま　竹澤和子

寒鰤を捌く親父の出刃光る
チリ鍋やスーパーの棚品薄に
切り餅と里から届く麦芽あめ
ダンボール箱を潰して妻師走
喪の明けて空き部屋広げ冬に入る

加藤でん治

水涸れて沢に佇む影ひとつ
ひだまりや友と語らふ冬紅葉
冬紅葉合せ鏡の水面かな
冬紅葉行くさきざきの道しるべ
灯明をゆらす仏の冬籠り

鈴木香音子

若きらの通りて枯野生き生きす
帰り花インスタ映えの旧家跡
歳末や鴉にまでも急かされて
大根引葉ばかり立派にて候
本殿までの胸突き八丁冬桜

枚方　寺内洋子

池に浮く楕円のボール浮寝鳥
凩に飛ばされさうな昼の月
辞書並ぶ障子明かりの父の部屋
勤労感謝の日突貫工事終へ拍手
初雪や坊舎の窓の薄明り

さいたま　湯浅　和

かな女句碑黄色に埋まる十二月
若き跡継ぎ白菜作り巧みなり
飛行機の左の窓に冬銀河
山眠る音のかすかに水琴窟
リュック背に喧騒の街年の市

森下美智枝

紅葉狩招かれたるもおさんどん
好き勝手な熊も一緒に山眠る
下町の活気盛んや年の市
全身に枯芝まとひ犬じやるる
子とはぐれ右往左往の年の市

小川洋子

枯葉舞ふ川沿ひの道暮れかかる
思ひ出の膝掛ほどく手には皺
半日をジムで汗して年惜しむ
眠る子の寝相笑ひて年惜しむ
膝掛の過去の温みを手繰り寄す

川口　新井のり子

アピールのポインセチアや家具売場　若狭　岡本祥子
柏手をひときは高く年用意
風邪薬多めに置きて薬売り
追善の帰路に揺らめく石蕗の花
演習の号砲響く枯野原

山茶花のはらはら散りて色の道　東京　畑宮栄子
山の辺を枯葉踏みしめ狩人行く
木登りの得意な熊も里に下り
勤労感謝の日国旗揚げる民芸店
枯枝に蛇のからまる八幡宮

冬の空飛行機雲の真つ直ぐに　大島千恵
枯枝に鳥の群れとぶ青い空
一輪の白き山茶花生け垣に
枯薄小川の流れ追ふ如く
風に舞ひ落葉散りしく道歩み

をんなしやうぐわつ賢妻きほひ羽目外す　吉川　杉浦千祐
ストーブに哀歌くぶるや眠れぬ夜
熱燗の香に噎びつつ友偲ぶ
応へなき問が山積み都鳥
糸車廻し終ふるや年の果

挽歌なり義経堂に冬紅葉　さいたま　羽島秀子
水涸れて吾が手の平の生命線
越後より名酒が届き年用意
冬薔薇や植ゑけむ女の忍ばるる
ブランデーグラスに映る聖樹かな

緑道をからから舞うて冬紅葉　鳴海順子
冬紅葉空透きとほり葉の四つ
ボルシチを囲んでをれど隙間風
幼馴染みのハグあたたかし冬紅葉
隙間風カーテン小さく揺れてをり

鳥は何故赤い実が好き実千両　川島夕峰
朝霜の硬き靴底通学路
じんじんと靴底伝ふ朝の霜
実千両巧みに鳥を誘ひけり
すらすらと九九の響きや小春空

雲の上の富士を眺めつ日向ぼこ　春日部　仲田利子
年末の第九は地元楽団で
冬星の間ちかちか機影過ぐ
石蕗の花笑み浮かべつつ妹逝けり
給湯器交換終へて冬を待つ

窓の灯のなほ温かく降誕祭
テーブルにリボンの箱やクリスマス
スカイツリー聖樹となりて星まとふ
新しきブーツも踊るクリスマス
愁嘆も悔ひもひとまづ山眠る

東京　山中いちい

襟を立て水面に映る冬の月
小春日に煙（けむ）と化したる友送る
かさかさと落葉を踏みて帰る道
マフラーの中で台詞を繰る初日
クリスマス平和を祈る子に涙

桐山遊童

雑炊や吾病みし日の母の味
病床に届く厨のおじやの香
朝風呂と朝酒一杯我師走
リサイタルピアフになり切る師走の夜
またひとり薄墨便り師走なり

さいたま　北出久美子

声明に美声悪声寒日和
冬晴や兵役のなき国であれ
さんざめく落葉の海に顔二つ
道連れの落葉踏む音ユニゾンで
閉ざされたる庭の落葉の深さかな

横山礼子

冬晴や小さき機影は空にとけ
冬晴や数多訃報のはがき来る
すべり台駆けつこしたる落葉かな
数へ日や訂正できぬ日を悔やむ
冬うらら四十七士の泉岳寺

さいたま　綿貫ひさの

初霜や両手で包（くる）む缶コーヒー
熱燗や明日のことなぞケセラセラ
首都高の影が冬田に伸びてをり
転勤の辞令を胸におでん酒
行く年や窓拭き上げてワンカップ

大熊健司

山寺や石段の霜踏み惜しむ
憂き我を燃えあがらせよ実千両
霜晴や猫は港にみちびかれ
海凪ぐや舟も泊りも冬日和
しばらくは落葉伝ひに沢の音

秋谷風舎

一歩づつ踏みしめ歩く枯野かな
約束を果たせず悔やむ枯野かな
釣糸をじつと眺むる冬の川
車窓より眺むる古都の冬の夕
塔婆持ち永代供養冬の暮

和歌山　南條きわゑ

冬晴や窓の曇りのなくなりぬ
冬晴や北アルプスものぞきけり
盆栽の銀杏落葉や黄金色
目を開き落葉を避ける夜道かな
地下ダムの恵みうれしや甘蔗刈

さいたま　小駒さち子

洗ふ手に洗ひ残しや十二月
不本意ながらお揃ひの冬帽子
クリスマス抱いてくれろと猫の来て
一等の破顔や青き冬北斗
年惜しむ季語に遊びて遊ばれて

大阪　遠藤人美

散紅葉記念写真の鶴ヶ城
酉の市浅草寺へと足伸ばす
冬の田や向かうにビルの影微か
文集に託せし夢やスキーヤー
冬田道婆の背中の幼き子

さいたま　武田重子

冬晴の空気の揺らぎバグパイプ
年の暮調律を待つピアノかな
お揃ひの赤ワンピース年の暮
年の暮笑ひの渦の映画館
大皿の最後の柳葉魚じやんけんに

鈴木敦子

冬霞モノクロ映画の一シーン
枇杷咲くや真昼の月の透けて見ゆ
極月や第九帰りの赤ワイン
眠るため薬半錠星冴ゆる
カピバラのやうにゆつたり柚子湯かな

さいたま　小山あつ子

野良猫とあそぶ子二人柿落葉
売る前の本読み返す年の暮
雑巾のひかりを絞る年の暮
年の瀬やバケツのなかの小宇宙
鯛焼を二つに分けて星の丘

石関六弦

北風の瞬時に虚空つかみをり
雪吊の幾何模様編む水鏡
山茶花の散り敷く奥に小寺院
夕影の岩に添ひをる石蕗の花
短日や白樺の原影たたむ

蛭田律子

バス降るる歩に凩の容赦なく
木枯や星の煌き一段と
半眼の辺り窺ふ浮寝鳥
浮寝鳥香煙流るる弁財天
何事もなく夕暮の浮寝鳥

森　和子

千代紙に生れしサンタや父無し子
傾きは地軸となりぬ冬林檎
青空や落葉縁取る水たまり
夕風に待ち人いまだ冬桜
柊のこころに写すかほりかな

大阪　飯塚智恵子

年の瀬や畑通ひは稀となる
玻璃窓を薄日の通る年の暮
独り身にポインセチアの色辛し
冬田中トランペットの音澄めり
廃村の冬田トラクター捨て置かる

さいたま　鈴木藻好

イヤホンはロックンロール落葉掃く
置き去りの落葉籠より猫の顔
落葉焚忍者のごとくどろろんと
冬晴や抜きつ抜かれつ心拍音
冬晴や画集探しの古本市

樋口元美

川涸るる恨みの嵩も細くなり
水涸るや防音壁の薄情さ
あと幾夜残る紅葉の鮮やかさ
たまご酒忘れし母の手の温み
令和来て世相悲しき山眠る

草加　持永喜夫

おでん鍋人柄でたる箸捌き
赤提灯あとの酔句や冬の月
ラグビー戦たられば論議果てしなく
鳥威し見抜く仕草や村雀
新海苔の帯の墨文字はなやげる

さいたま　香田裕誌

石蕗咲きて淋しき家を包みをり
割り干しの白菜光る朝の庭
十二月第九に乗りて大驀進
翳る庭白菜漬くる大樽に
駅前の賑はひ楽し歳の市

宮代　関谷多美子

朝日浴び今日も生きなむ冬紅葉
湧き出づる栄華の跡や水涸るる
冬日向安楽椅子で夢うつつ
冬至風呂罅割れの指浸りゐて
木の葉降る径わが白髪染まりけり

さいたま　太田　貴

数へ日や大掃除は底無し沼
煤逃や行方知れずの「ミケ」と父
姉もゐて卒寿の母と初写真
初鏡決意新たに眉きりり
夜勤終へ詣づる人と初電車

若狭　松村笑風

巫女舞の鈴音にあはせ銀杏散る
どれほどに敷きつめる気か舞ふ落葉
人並に年を惜しみて蕎麦を食ふ
目標に辿れぬままに年惜しむ
膝掛に令和の午後の陽が満つる

川口　田村福美

木守柿明日は夜汽車で東京へ
気嵐や下山を急ぐ樵たち
月細し露天風呂より木守柿
木守柿姉は二十で嫁に行き
気嵐や船出を急ぐ港町

さいたま　山下ユリ子

冬紅葉いよよ色濃く陽に向けり
短日やサッカーボーイの足さばき
暮早しベンチ横目に立ち話
石焼藷今日も来てゐる交差点
焼芋を割りてじやんけん破顔かな

東京　柳父はる

冬の水血管のごと里山に
奥山に神々の居て冬の水
山茶花やひとりで練習さかあがり
ピンヒール山茶花の道急ぎ過ぐ
山茶花や素焼の鉢を選びけり

所沢　飯室夏江

華やぎは老優にあり冬紅葉
涸川や西に広がる地平線
境内の閑まり返る十二月
底知れぬＡＩ来たり冬ざるる
てつちりに破顔一笑平和かな

さいたま　岡田芳春

青空をカンバスにして木守柿
鳥たちは何処ぽつんと木守柿
終活はまづ捨つること冬うらら
最終の電車降りれば冬銀河
数へ日や母の指図のあれこれを

高原和子

水仙のほのかに香る仏間かな
なつかしき歌もいろいろ忘年会
風にまふ花びらゆれて枇杷の花
地面より顔のぞかせてふきのたう
早朝の雀とまどふ初氷

鬼石　加藤ナヲ子

「楽天命」九十五歳のクリスマス
マリア像見上げ輝く石蕗の花
孫嫁にソックスもらひ元日に
天界に待つ人多し年の暮
終の仕度に毛皮コートも処分せり

藤沢　小島喜代子

のつそりとフロントガラスに冬の蠅　鬼石　榊原聰子
うすらひに疎林とびかふ冬の鳥
三本のラムチョップもて薬喰
食材のなれぬ配達暮早し
静電気さけ愛用の冬帽子

ガザの子の黒きまなざし年惜しむ　さいたま　木谷葉子
忙しさに拍車かかりて年惜しむ
「あずさ」にて車内販売冬うらら
芥吐く塩水に牡蠣放たれば

強霜に針の山なる荒野かな　篠原さよ子
古文書を手繰る講釈実千両
出納の帳尻合はぬ霜夜かな
実千両受験男子は舞台待つ

流星群師走の闇を演出す　和歌山　嶋田洋子
冬うららお地蔵様も夢を見る
八十路でもときめきあるや冬の薔薇
身の丈に合はすにちにち年の暮

落葉舞ふ見舞ひ帰りに仰ぐ天　さいたま　前田英子
冬晴や筑波嶺見ゆる運河跡
川岸に翡翠「チー」と冬日和
枯野行き畦行き訪ぬ鶴

酒星や眠つたままの宝物　所沢　関根千恵
春の風ポニーテールを撫でてをり
つぶ揃ふ浅蜊の模様汐の色
艶やかな落花を結び首飾り

老木に月寄りそひて冬至かな　さいたま　持谷寿夫
手を温め暦をめくる寒の入り
参道に落葉舞ひ散り冬に入る
寒行や経読む僧の声高し

年惜しむ水明句会にぎやかなり　門真宏治
年惜しむ集ひて「第九」合唱す
小屋仕事あかぎれ何ぞ牡蠣を剥く
松島の海の色良し牡蠣揚ぐる

落葉踏む音に目醒むる木の葉石　糸井しるく
窓に見る最後の落葉栞とす
冬晴や畑の雑草のびのびと
小滝から川へ落葉の旅遥か

命日の母へ好物年惜しむ　石井直子（さいたま）

獅子柚子の福を呼びたる面構へ

真つ新な厨の束子年用意

酢牡蠣食ひ少し大人の心持ち

牡蠣フライ大をあなたに取り分けて　三浦真由美

三陸の牡蠣に宿りし絆かな

古希祝ふ同窓会や年惜しむ

夫との旅の想ひ出年惜しむ

夜の空柳葉魚と同じ形の雲　小田三茅

干し柳葉魚空を仰ぎて旨み出す

一輪の花を愛でるや年の暮

温き陽の落葉に埋もれ吾子二十歳　駒谷行雄

何もせで師走になりて何もせず

大晦日談志三木助聴き比べ

八十路越え故郷に感謝山眠る　藤沢　藤田實二

東海道一人で暮の大阪へ

父母の声なつかしきかな除夜の鐘

水明通信

文芸映画鑑賞のお勧め

染谷風子

さいたま文学館において年五回、「文芸映画上映会」を開催している。昨年十月は溝口健二監督『雨月物語』（昭和二八年）、十二月は降旗康男監督『ホタル』（平成十三年）、今年二月は滝田洋二郎監督『おくりびと』（平成二〇年）の予定である。一昨年に今村昌平監督『楢山節考』（昭和五八年）を鑑賞した。同名の木下恵介監督作品（昭和三三年）も見たいがまだ機会がない。「文芸映画上映会」は入場無料である。鑑賞券は同館内の図書館で配布し、会場でも次回分を交付している。会場の文学ホールは定員二〇二名で映画鑑賞には適した広さである。毎回満席で年配者が多い。若い時からの映画ファンと思われマナーも良い。

最近、古い映画を上映している名画座が減少している。日本映画の質の高さを知るためにも同上映会の鑑賞を是非ともお勧めする。

作品評

山本鬼之介

月山の上に弓なる冬銀河　　西幅公子

筆者が愛読していた藤沢周平の出羽庄内「海坂藩」を扱った時代小説に登場する出羽三山の中で一番高い山が月山（がっさん）で、標高一九八四メートルの四季を通じて美しく見応えのある名山である。昭和三六年に、鶴岡市の近在にある化学工業薬品工場で新入社員の実習をする傍ら出羽三山に案内してもらい、その夏月山に登り、高山植物に触れたり頂上の月山神社に参拝した想い出がある。

掲句の季節は冬であるから、殆どが雪におおわれた山容を観ることができよう。晴れた冬の夜、しろがねの月山を輝かす銀河を、「弓なる」と形容したことで、信仰の名山である月山の偉容を格調高く言い表している。

山眠る添ひ寝するかに山里も　　清水桂子

添い寝の語感は、赤子か幼児に対する母親の寝姿である。昔風の子守唄か、今なら童話の一節か、その子が喜びそうなつくり話などを聞かせている内に寝息が聞こえてくる。

添い寝の姿を、小高い山と麓の村落に譬えた牧歌的な表現に温かみがあって良い。

伊賀晴れて紅葉吹雪に佇みぬ　　池田珪子

伊賀は、甲賀とともに昔の忍者の里として名高く山深い土地である。晴れわたった冬の某日、伊賀を旅した掲句の作者である。折からの強い風に、見事に紅葉した冬紅葉が舞い散ってゆく。あまりにも壮観な景色に言葉を失い、只ただ佇んでいるばかりであった。

花吹雪は「落花」の傍題として歳時記にあるが、紅葉吹雪は無い。筆者は、選者の立場で作者の造語的季語（？）に首をひねったが、目を閉じてその場の情景を想像すると、端的にその有様を表現するには、これ以上の言葉が見付からないとの判断に至り、この句を採用した。「佇みぬ」がその時の作者の心情を述べている。

慎ましく生まれ気ままな六花　　篠﨑紀子

六角状の結晶から名付けられた雪の異称であるが、なかなか含蓄のある言葉だと思う。気象学的には、雪が生成されるには幾つかの条件があると思うが、「慎ましく生まれ」の中には、「奔放さ」が包み込まれているのだと思う。であるから、

生まれた後の「気ままな」に結びつくのであろう。蝶よ花よで育てられた金満家の一人娘のようなものなのだろうか。

鰐口を「こん」とひと撞き空つ風　　菅原卓郎

鰐口の意を辞書で調べるといろいろな説明が出ているが、本句の鰐口は、「社殿や仏堂の正面軒下に吊されている金属製の音響具」と記されているものである。図解されているので、普段なんとなく打ち鳴らしていた人も「あああれか」と納得するだろう。鰐口を鳴らしたのが折からの空つ風であるところに俳諧的な趣がある。

其の音に琵琶の調べを落葉踏む　　山岸久美子

其の音すなわち琵琶を弾く音と解釈した。筆者は琵琶についての専門的な知識は無いが、撥と絃を擦り合わせて弾く時に発する音のように感じた。さて如何なものか。音楽を趣味とする作者らしい一句である。

出征兵士送りし杜の帰り花　　佐々木史女

昭和一四年に発表された「出征兵士を送る歌」の歌詞を読んで、この句が昭和の戦前の世相を映し出していることが判った。出征する人の産土の社や駅頭で、家族や見送りの人々が日の丸の小旗を打ち振って激励した光景が見えてくる。

「わが大君に　召されたる　生命光栄（いのちはえ）ある　あさぼらけ」と、七五調に統一された歌詞は、出征者の心を奮い立たせるのに効果を為したと思われる。故郷に帰還した遺骨と同様に、いま鎮守の杜に帰り花が咲き、老者の心の中に入り込む。

嬉しきこと数へて眠る十二月　　菅原真理

明治三四年に発表の瀧廉太郎作曲の童謡「お正月」が聞こえてくるような俳句である。凧揚げ・独楽回し・毬突き・羽子つきなど、この歌に出てくる遊びは関係なかろうが、数えるほど嬉しいことがあるのは、まことに倖せなことである。きっとシンデレラになった夢でも見るのではなかろうか。

「考える人」見つめ考ふ冬うらら　　岡田宣子

フランスの彫刻家ロダンの作品「考える人」のブロンズ像は、上野公園内にある国立西洋美術館のほか日本国内に四ヶ所ほど置かれているようだが、何と言っても国立西洋美術館のものが馴染み深い。あのポーズを真似て写真を撮っている人を多く見掛ける。同じロダンの作品に「地獄の門」があり、「地獄へ落ちてゆく人を見ている」との説もあるようだが、やはり気になる恰好である。作者はそれほど暇人ではないと思うが、小春日和の午後、「考える人」と一緒にあれやこれやと思考を巡らしている。

離れまで名入り提灯北時雨　小林京子

季語の「北時雨」は、広辞苑によると「北の方角から降ってくる時雨」と説明されているが、京都の北山のイメージと相俟って、掲句の離れは何となく京都の北方に位置する地の格式のある料亭のように思えてくる。その店の屋号が刷り込まれた提灯で客を離れへ案内（あない）するのであろうか、と思っただけで好奇心が湧いてくる。

傘かしげ霙るる橋にすれ違ふ　元田亮一

霙は、傘を差す人の気持を雨とは違ったものにするように思える。ましてや前方に幅の狭い古風な橋があるとすると、自然と心が高まるような気がする。そして、この場はいよいよ江戸仕種の中でも代表的な「傘傾げ」である。行き交う相手は是非とも年頃の女性であってほしいし、さらに理想を言えば和服姿であってほしい。その一瞬互いに相手の顔を覗き込む両者。その後のことは読者の想像に任せよう。

古城従容供のごとくに冬の山　丸屋詠子

嘗て豊臣政権の頃に多く建てられた天守を持つ城が、その後徳川政権の「一国一城令」によってその数を減らし、更に明治六年の「廃城令」によって激減したと言われている。現在日本国内で天守のある城は十二城だそうで、大変貴重である。さて、この俳句の古城は何処にある城であろうか。天守は在るのかなど疑問点はあるが、その規模は小さくても俳句が示す雰囲気によってこの城の存在感が確りと示されている。

会長の音痴馬鹿うけ忘年会　新暦文

新型コロナウイルス禍の過激な世相が何とか収まりを見せ、年末年始の忘年会と新年会が復活した去年今年であった。会社の忘年会で、酒宴に引き続いてカラオケの二次会になったのであろう。逃げ腰であった会長が社員のパワーに押されて遂にマイクを持たされて超懐メロを披露したが、その迷調子ぶりに皆びっくり。しかし、会長の人柄が大いに受けた一夜であった。

関八州を搦め捕りたる空つ風　飯田忠男

江戸時代に「関八州取締出役」俗に「八州廻り」と呼ばれる役職が勘定奉行の支配下に置かれ、関八州の幕府直轄領の治安を守っていた。右の俳句は、この八州廻りを念頭に置いて読まれたもので、地方色の濃い冬の季節風である空つ風が関東一円を搦め捕ってしまったという句意である。その時期に空つ風を日々体験した人ならすぐ判るその風の強力なパワーを如実に表した俳句である。

年用意外陣を占むる薦被り　皆川更穂

京都の松尾大社は酒の神様で有名であり、むかし参拝した時外陣に薦被りの酒樽が並んでいる光景を見て感激した想い出がある。であるから、この句に出会って直ぐに共鳴した。作者も同じような気持を持たれたのではないかと思う。

冬霞北山杉のそそり立つ　反町　修

「北山杉」は京都府の木になっており、京都の市街地から高雄に入る国道一六二号線の沿道に、美しい北山杉の山並が観られるという。北山杉を加工して作られる磨丸太の銘木の生産林業として全国に識られており、その銘木は、床柱や梁などに珍重されている。

作者もいつの日かこの地を訪れたのかと思うが、冬霞に包まれて林立している北山杉の姿は、山水画の一幅を観るようで心が休まる。

ふるさとは行きも帰りも空つ風　阿部幸代

故里を訪れた作者。きっと空っ風の激しい土地なのであろう。最寄り駅から実家まで、往復向い風に苛まれた悔しさがこの一句に現れている。筆者にも同様の経験があるので、作者の気持がよく判る。

縄のれん客と一緒に隙間風　霜多光代

およそ居酒屋とは縁が無さそうな作者がこんな句を詠んだことに驚いた。それもなかなか実感が伴っているので、若しかすると経験者なのかなとも思い、嬉しく鑑賞した。何せ縄暖簾の居酒屋であるから、戸の隙間から風が入ってくるのは当然かと思う。店に入ってから戸をきちんと閉めない客に便乗して入り込む風の人間臭さが面白い。

暮し振りほのと匂ひぬ白障子　越田栄子

それぞれの家庭ごとに個別の匂いがある。家族構成、日常の食事内容、生活様式などによって年月の中で作られた匂なのである。それでこそ家庭の存在感があるのだと思う。

風呂吹を女将がそつと左党　梅澤輝翠

手狭な小料理屋であろう。日本酒好きの常連客が、白木のカウンターの奥の席で静かに飲んでいる。気働きの良い中年の女将が、出来立ての風呂吹大根をそっとその客に差し出す。心の籠もった特別料理なのである。さて、その後の展開については、読み手の皆さんの想像力に委ねよう。

水琴窟

（一月号鑑賞）

池田雅夫

茸狩父のみぞ知る秘密場所　山戸美子

「茸狩」とくに「松茸」は、たとえ親子であってもその場所を教えないという。松茸に限らず舞茸なども発生場所は秘密にしておくようだ。天然の茸は香りが高く風味もよい。希少な高級品である。頑なに狩場を守る父の威厳がそこにある。

宵闇やちびりちびりと地酒呑む　後記朝香

「宵闇」に月の出を待ち侘びて晩酌を始めたのだ。「ちびりちびり」にもどかしさが表われている。なかなか現われない月に、酔がまわってきて、「地酒呑む」と言わざるを得なかったのだ。「呑む地酒」との感覚を比較してみよう。

踊り終へて胸元熱き帯を解く　田村福美

女子七歳で初めて帯をさせる「帯解」。掲句は「踊り」が主役であり、「帯を解く」は単なる動作であろう。「熱き胸元はだけたり」のようにして紛らわしさを解消したい。

九十歳の手編みをもらふ小六月　小川洋子

「セーター」あるいは「カーディガン」などと具体的に言いたいところであるが、「小六月」を詠むためにあえて「手編み」だけにとどめたのだ。「九十歳」でなお編物に励んでおられる。ていねいな仕事に、さぞかし暖かいことだろう。

薄藍の山にあけぼの秋静か　鈴木香音子

黒かった山の影が「あけぼの」とともに次第に「薄藍」色になり、その全容が見えてくる。山々に少しずつ秋の気配が感じられる。落ち着いた秋の朝の一景を切り取った観察力を賞賛する。あけぼのの空の茜色との相対も見逃せない。

長き夜の古地図に疼く旅ごころ　大熊健司

秋の夜長を持て余し、「古地図」を広げて昔の時代を想像しているのだろう。江戸時代の五街道など、その名残りが各所に現存し、観光の名所となっているところも多い。紅葉の時期が待ち遠しい。「疼く旅ごころ」に逸る気が窺える。

直売所冬瓜ひとつ残りけり　樋口元美

生産地に直結して各地に「直売所」がある。朝採りの野菜など、新鮮でおいしくその上安いのが特徴。楕円形で五十センチもある「冬瓜」。その重さで売れ残ったのだろうか。

駅前の喧騒を抜け夜長かな　山中いちい

異常に暑かった夏も終り、ようやく秋を迎えた安堵感がある。「駅前の喧騒」を猛暑として解釈し、さまざまなでき事を重ね合わせて振り返っている。「夜長」はそうした時間に最も適している。「喧騒を抜け」で間をおいて読みたい。

芋の葉に煌めく星のひとかけら　森美枝子

一気に読み切る句に、つけ入る余地がない。「煌めく星のひとかけら」は明らかに「芋の露」である。その光りを星にたとえたところがいい。たとえ昼間のことであっても、事実星に見えたのだ。月光に輝いていたのならなおさらのこと。

いわし雲頭上いつぱい散開す　蛭田律子

「いわし雲」であるから、「頭上」はあたりまえと言われるかも知れないが、「散開す」の措辞に納得した。「散開」とは、散らばり広がるの意で、雲の規模を推し量ることができる。一つの語に力があることを教えていただいた。

池に落ち浮ぶどんぐり沈むどんぐり　駒谷行雄

「どんぐり」のくり返しを避けることはできない。よって下五の字余りはしかたがない。勢いで「沈むどんぐり」と読み切ってしまおう。定型を重んじる『水明』ではあるが。

木道や小田代原草紅葉　木谷葉子

奥日光で、戦場ヶ原と並ぶ「小田代原」はミズナラの黄葉と草紅葉が美しい。小田代ヶ原には「秋の貴婦人」と呼ばれる白樺の木がある。外周の遊歩道をゆっくりと巡りたい。名詞ばかりが連なっているので、「三段切れ」に注意したい。

赤とんぼ時々首をかしげをり　加藤ナヲ子

竿の先に止まっている「赤とんぼ」は動くものに対し「首をかしげ」たり上下させることが多い。特徴的な大きな目はよく見えるようだ。赤とんぼの小さな動きに注目し、句に詠むことで「赤とんぼ」がより身近で愛しく思える。

内緒ごと誰にも話せぬ梔子の実　北山建治郎

口を噤んで何も話さない「内緒ごと」。『人間を永くやっていれば誰にでも内緒ごとの一つや二つ、大有りのこんこんちきよ』と啖呵を切るにちがいない。が、ここはぐっとがまん。「梔子」の音にかけたのだ。酔ってぽろっとなんてね…。

冬近し年中行事の渋皮煮　三浦真由美

たいそう手間のかかる栗の「渋皮煮」。毎年の楽しみである。「栗の渋皮煮」を主役にして詠んでみてはいかがか。あえて「冬近し」にした意図は、それで近い冬を感じるからか。

大村節代　選

鼓笛集

ビルの空どんと寒月身じろがず
雑煮餅数問ふ声の高らかや
松の内予定なくとも薄化粧

菅原真理

塵ひとつなき玄関にある淑気
床の間を飾れば部屋に淑気満つ
水割りやお節肴にちびちびと

高原和子

初春や人みなマスク真新し
うす化粧客招く日の春著かな
新品のスニーカー履く明の春

清水桂子

黄昏て碧む氷上浮びけり
寒の漬物桶より掬ふ手の痛さ
隅々に渡る晩鐘寒の街

岡田宣子

愛の呪文か氷しづかに紅捕ふ
合唱は初のソプラノ初稽古
つつついと小鳥渡りぬ氷面鏡

杉浦千祐

決断は常に孤独よ実千両
御積もりを促さるるや冬北斗
上州の桐生の村のからつ風

小林京子

天井のマラソンさすが嫁が君
水仙の背すぢ伸ばしてみな咲けり
放課後の女子のぺちやくちや山眠る

梅澤輝翠

春待つや水天宮にみすず帯
言の葉は要らぬ偕老枯木星
落ちてなほ花は上向き寒椿

新　暦文

初富士やダイヤモンドの贈物　小駒さち子
波ゆれて水平線より初日の出
辰野町山より出づる初日かな

ホホバオイル塗つて傘寿の初鏡　寺内洋子
ほの辛き大根おろしや寒に入る
お旅所の柵真新し初日影

成人式出会ひあること楽しけれ　千坂平通
冬の空墨絵のやうなビルの街
老いと日々斗ひの七草がゆ

お降りのありて庭木の初初し　飯田忠男
寒喰もほどほどにしてウォーキング
句の道も遠く八十路の初日の出

記念日に紅筆引くや冬椿　篠原さよ子
この冬田女主も年積もる
蝋梅の一枝ふはりと押し包む

四代の家族集ひて雑煮膳　関谷多美子
幼子は小さき椀に雑煮食む
三が日脳トレ日記友として

ビルの空浮ぶ初鳩万華鏡　持永喜夫
鶯替や能登に降り積む悲しみを
初詣気随の吾は恥を知り

鼓笛集作品評

大村節代

雑煮餅数問ふ声の高らかや　菅原真理

正月はめでたいと思いながらも、主婦の忙しい様を感じさせられる句。雑煮の餅は、いくつ食べるのと家族に聞いても、それぞれ何かやっていて、なかなか全員の数が把握できない。何個用意したらいいのと、普段ならいらいらするが、今日はお正月。中七下五により弾んだ声音だと思う。今日はお正月だから、のんびり、ゆっくりですよね。

水割りやお節肴にちびちびと　高原和子

お節を肴に飲む時は、日本酒だと思っていた。それが、水割とは、意表を突かれた。ウィスキーか、焼酎か、恐れ入りました。残り物のお節を肴に、ちびちびといいですね。お節に水割とは、若者もお節に新しい価値見出すのかなと思ったりする。

新品のスニーカー履く明の春　清水桂子

昔は正月と盆には奉公人が休暇をもらって、親もとに帰るのを藪入りと言ったとか。その名残りか、正月には、新しい下着や服を下したいと思う。新しいスニーカーを履いて、身も心も、すっきりと、街を闊歩する。すると明の春の季語通り、初春を迎えるほのぼのとした喜びが湧いてくる。

鼓笛集巻頭（二月号）

私の好きな一句（自句自解）

吉川拓真

去年今年皆勤賞の置時計

母校の埼玉県立大宮高等学校で皆勤賞のお祝いとしていただいた置時計。机の上に置き、今でも大切に使っている。あれから時が流れても置時計も私も止まることなく年を越し動き続けているのだ。そしてこれからも。

訃報

季音同人　**岡野　順子**様

令和五年十二月七日

御病気の為逝去されました。

季音同人　**霜中　冬至**様

令和六年二月十二日

御病気の為逝去されました。

謹んでお悔み申し上げます。

俳句

特別作品　高野ムツオ・鈴木貞雄・山下知津子

4月号予告

3月25日発売

予価1,100円（本体1,000円）⑩

大特集

俳句と教育

教科書の中の俳句／新聞や大会の中の俳句

俳人が学校で俳句を教えるなら／国語を超えた人間教育

特集

俳句の頂

俳句の高みとは／私の思う至上の俳句

コラム　憧れの俳句

句集特集　**小澤實『澤』**

角川俳句賞作家の四季〈春〉……野崎海芋

新連載評論

小林秀雄と俳句……青木亮人

虚子の遺産……井上泰至

近代俳人列伝……岩井英雅

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！　電子版は「BOOK☆WALKER」（https://bookwalker.jp/）など電子書店で購入できます。

発行　角川文化振興財団　発売　株式会社KADOKAWA　https://www.kadokawa.co.jp/

句集喝采

曲淵徹雄

◆宮谷　昌代「竹の春」

ふらんす堂

著者略歴　昭和二十年三重県生。平成三年「天塚」入会。平成四年「狩」入会。平成九年「天塚」同人。平成十一年「狩」同人。「天塚」編集長。平成十四年句集『母』。平成二十五年「天塚」主宰。平成二十七年句集『茶の花』。平成三十一年「香雨」創刊同人。俳人協会評議員。京都俳句作家協会幹事。城陽市俳句連合会会長。

著者の第三句集。八十歳を前にして平成二十八年から令和四年までの句を句集にすることにしたと、「あとがき」に記す。句集名は、「天命にゆだねて励む竹の春」より。

まほろばや声のびやかに初烏
緑さす玻璃戸の奥に歓喜天
秋灯オラショの低き声響き
飛火野の芽吹きうながす風のこゑ
社家町に添うて行きけり酢茎売

以上五句、写生を基に季語と共鳴し、格調のある句から。

ほうたるや星にも生死あるといふ
今までも今も幸せ赤まんま
ありがたうは結びの言葉冬灯
老いてなほ赤を力に登山靴
子と遊びたくてどんぐり拾ひけり

第一句～第三句、季語との取合せが絶妙。第四句、第五句、著者の明るく、おおらかな人柄を思う。

他に「十二月八日朝の白ご飯」などの惹かれる句がある。

◆長谷川昭放「漂泊と定住」

東京四季出版

著者略歴　昭和二十二年千葉県生。平成二十年「中井俳句同好会」入会。「新俳句人連盟」「鹿火屋」を経て平成二十二年「顔」入会。平成二十六年「顔」新珠賞。「顔」同人。令和元年「顔」賞。現代俳句協会会員。神奈川県現代俳句協会幹事。神奈川県俳句連盟理事。中井俳句協会会長。

著者の第一句集。定年後に俳句を始め、十六年間の句から三一六句を収載。句集名は「漂泊のくらげ定住の人類」より。

風花の音なく残す一行詩
千枚田千の安堵の落し水
初あかね山河しずかに脈を打つ
餡パンの臍まで食べてまだ寒い
春眠を袈裟斬りにする腓返り

第一句～第三句、抒情ゆたかな句。第四句、第五句、俳味のある楽しい句。

悠々の風の切つ先鬼やんま
春水のざぶざぶ洗う生命線
戦争を知らぬ軍手で蜜柑もぐ
寒卵こつんと気付く親不孝
万物に春風という応援歌

第一句～第三句、鋭い観察眼と感性の句。第四句、第五句、著者の人間味を感じる句。

希望とは歩き出すこと探梅行
希望の未来へ歩き続けられますように。

網野月を　選

山紫集

山眠る城に光の彩なして　鈴木玲子
サッチモの声の掠れや山眠る　新暦文
山眠る起こさぬやうに鯖街道　松宮保人
山眠り太郎次郎は眠りしや　梅澤佐江
懐に抱く狼山眠る　曲淵徹雄
鉄塔の碍子きらめき山眠る　森川義子
山眠る一軒だけの秘境の地　青木鶴城
トンネルに腹あけわたし山眠る　西幅公子
蕎麦部屋に座する石臼山眠る　秋谷風舎
なやましき風は鼾か山眠る　池田雅夫
――以上特選
咲くために根育つ時山眠る　榊原聰子
筑波見ゆ寝相あれこれ山眠る　佐々木史女
山眠る貨車が入り来る零番線　笹本啓子
過去総てあるがままなり山眠る　篠崎紀子
夜行バス降り立つ美濃は山眠る　篠原さよ子
山眠る麓のバーのラストオーダー　渋谷きいち
山眠る麓の尼寺人影なく　嶋田洋子
ゲレンデの喧騒よそに山眠る　清水桂子

山眠る熾火のやうに隠れ里　下川光子　一泊の温泉の宿山眠る　武田重子

八十億人（はちじふ）の地球沸騰山眠る　霜多光代　山眠る雪崩の音も子守歌　田中章嘉

傘雲を載する富士山眠りたり　菅原卓郎　山眠る実家無人のまま十年　寺内洋子

彩りはまた巡り来む山眠る　菅原真理　三年日記買ふこと忘れ山眠る　飛永　鼓

山眠る「さくらさくら」は子守唄　杉浦千祐　秩父神社の賑はひよそに山眠る　仲田利子

山眠る熊は眠れず人里に　鈴木藻好　古民家が静まり返り山眠る　南條きわゑ

戦争の残虐狂気山眠る　関谷多美子　気にかかる内緒の話山眠る　野口和子

エネルギー蓄へてるか冬の山　瀬戸雄二郎　山眠る最後に入日描くやうに　野田静香

碧天をとんび旋回山眠る　染谷風子　父の里大和三山眠りけり　野平美紗子

山眠る患者仰臥のサンルーム　反町　修　廃村の朽ちた残骸山眠る　野村美子

牧水の歌碑を抱きて山眠る　高島寛治　争ひも迷ひもなきかに山眠る　畑宮栄子

山眠る密かに爺は鎌を研ぐ　髙橋満耶子　山神のララバイ聴きつ山眠る　原田秀子

警笛はカーブを曲がる山眠る　樋口元美
億年の幽かな愁ひ山眠る　日高道を
ほどほどにすまぬ晩酌山眠る　檜鼻ことは
山眠る一刻な夫丸くなり　福田千春
這ひ上がる送電線や山眠る　保坂翔太
博徒にも菩提寺のあり山眠る　正木萬蝶
生地出ぬ姉の生涯山眠る　町野広子
ひとつ家を懐に入れ山眠る　松井由紀子
龍神の祠慎まし山眠る　丸屋詠子
関八州懐に抱き山眠る　丸山マスミ
新しき命を宿し山眠る　宮崎チアキ
令和の世神も仏も山眠る　持永喜夫

山眠る起こさぬやうに出勤す　元田亮一
山眠る婦人仰臥のシルエット　本橋稀香
膝上に猫丸丸と山眠る　森　和子
老いてなほ登る仲間や山眠る　森下美智枝
引力に撓む架線や山眠る　森美枝子
見送りのオルガン哀歌山眠る　山岸久美子
けもの等の夢を包みて山眠る　山下ユリ子
呟きはアウフヴィーダゼーエン山眠る　山中いちい
眠る山日なたに浮かぶけもの道　湯浅　和
伐採の音を許して山眠る　横山君夫
山眠る巨木の息を確かむる　横山礼子
朝の湯に先客の無し山眠る　吉川拓真

遥かなる宇宙へ続く山眠る　綿引まりこ
啄木の息づく校舎山眠る　阿部幸代
眠る山少し下手に父祖眠る　荒井倶子
炭焼の煙仄かに山眠る　飯田忠男
ほろ酔の寒山拾得山眠る　池田珪子
山眠るそのふところに鳥けもの　石川理恵
山眠る座敷童の憩ふ宿　石田慶子
半生を峡に住み古り山眠る　井関礼子
山眠る女人高野の積荷藁　井上燈女
せせらぎを子守唄とし山眠る　井上玲子
行き交ふも忙し足音山眠る　上戸千津子
山眠る琥珀は虫を閉ぢこむる　内田恵子

ふところに廃墟のホテル山眠る　梅澤輝翠
雨粒の染みたる土鈴山眠る　遠藤人美
筬の音子守歌とし山眠る　大場順子
杣小屋を閉ざして下り山眠る　岡田宣子
草木枯る日に包まれて山眠る　加藤でん治
山眠る山には山の碇あり　川島夕峰
マジシャンの技か一変山眠る　熊倉千重子
山裾に賑はひ残し山眠る　河野はるみ
山眠る熊も眠りにつきにけり　小駒さち子
しろがねの北の大地や山眠る　越田栄子
突つ張りの鋏山逝き山眠る　小林京子
山眠るどんと無音の留まりて　小山あつ子
灯り待つカミオカンデや眠る山　近藤徹平

山紫集作品評

網野月を

山眠る城に光の彩なして　鈴木玲子

景を結ぶ決定力がないが、その分読者に任されてる部分の多い内容なのである。「城」の形体や「光」の具合は読者の想像の中にあるということである。筆者は、豪勢な城ではなくて、城跡ともいえる様な山城を想像した。その山城を然程高くない山が抱きかかえるようにしている。作者は色合いの少ない冬の景の中に光のスペクトラムを垣間見ている、と解した。モノトーンの景だからこそ、光の本質的要素が具に現れる様な感覚を呼び起こされている。ということは、上五の季語「山眠る」の時空間の設定の中に中七座五の句意が展開しているという構成を為していることになる。寒さの中にも日差しの力強さを感じている作者の感性の繊細さが窺い知れる。

サッチモの声の掠れや山眠る　新暦文

「サッチモの声」が効果大である。筆者などは「サッチモの声」のみでも引き込まれる句意なのであるが、多数派はそうはいかない。あの絶品のハスキーヴォイスを喚起する必要があるのだ。ライヴハウスの内の熱気と紫煙に比して「山眠る」に象徴される大自然の存在が悠大さを誇っている。

山眠る起こさぬやうに鯖街道　松宮保人

若狭から京都へ、峠道を越える「鯖街道」は幾筋かある様である。その中でも遠敷から熊川宿をとる若狭街道が鳥羽谷の住人である作者の「鯖街道」であろう。中七の「起こさぬやうに」は山での災厄を忌避する祈りにも似た言葉である。

山眠り太郎次郎は眠りしや　梅澤佐江

作者の意図は兎も角、筆者は金太郎と金次郎を思い出す。かの有名な三橋敏雄の辞世「山に金太郎野に金次郎予は昼寝」である。眠っているのか昼寝しているのかは定かではないが、何とも洒落た辞世なのである。敏雄の命日である十二月一日は「長壽忌」とすると嘗てあるお弟子さんから伺ったことがあるが、現在は「敏雄忌」が一般的である。

懐に抱く狼山眠る　曲淵徹雄

上五の「懐」は山塊の「懐」と解釈した。「狼」は冬の季語であり、いわゆる季重りの句であるが、「狼」は絶滅して

久しいので、いわゆる幻ということになろうか。大口真神の伝説を想起する句である。絶滅の種を季語として扱えるのか問題提起されている。

鉄塔の碍子きらめき山眠る　森川義子

鉄塔には雄雌があると先日ある句会で聞いた。電線を直線に連ねて張るときには雄鉄塔、電線を方向転換して曲がるときには雌鉄塔ということで、形体も異なるということであった。「碍子」は約二十五年程前に俳句界で一大ブームを巻き起こしたアイテムであった。一流俳人が「碍子」を取りあげて、無論、水明でも「碍子」の句が多く作句されたものである。雪山を想像してもいいかも知れないが、筆者は枯れ木賑わう冬山を想像した。しっかりとした構成力のある叙景句に仕上がっている。

山眠る一軒だけの秘境の地　青木鶴城

この「秘境の地」つまり山峡には「一軒」のみ認めることが出来る。何を生業としているのだろうか？興味が湧くが、この「一軒」が山の眠りを起こさないようにひっそりと生業に勤しんでいる景を想像する。作者の視座を訊ねたい気もするのだが、景を俯瞰した句は、視座を意識しない方が、広広として句の奥行きが増すようである。

トンネルに腹あけわたし山眠る　西幅公子

山の身になって山に感情移入している。ただ山の腹としたのならば在り来たりの叙景句になってしまうところであったが、「あけわたし（明け渡し）」の意を加味したことで成功している。黙って無念をかみしめている「山」の、沈黙故のその無念の深さを感じる。

蕎麦部屋に座する石臼山眠る　秋谷風舎

蕎麦を挽くためのこの石臼は稼働しているのであろうか。山と共に休業状態なのか。多分、果てしなくゆっくりと回っていると筆者は想像する。この「蕎麦部屋」は山間にある必要性は無いのである。町の中の一室の「蕎麦部屋」であっていいのである。そこで作者は蕎麦を挽きながら、眠る山に思いを馳せているのである。初冬に黒く熟した蕎麦の実と赤味を帯びた蕎麦の茎の広がる山畠を思い浮かべ、来秋にまた咲くだろうと白と淡紅色の五弁花を心に描いているのである。

なやましき風は鼾か山眠る　池田雅夫

季語「山眠る」自体も擬人法による季語であるが、そこを逆手にとって「鼾」を用いて人間の仕業のように発展させて作句している。狙いも明確であるし、効果も絶大である。なやましき＝辛い山風を許す心になっている。

新春俳句大会の記

正木萬蝶

令和六年の新春俳句大会は二月一日の木曜日に浦和パルコのコミュニティセンター第十四集会室にて開催されました。コロナが五類になって初めての新春俳句大会、兼題は「寒卵」「春を待つ」各一句、五十五名の出席で百十句（主宰の句を含む）となり一時三十分に開会されました。

司会・開会挨拶　　日高道を

主宰挨拶

「昨年より多くの参加者で嬉しく思う、来年は水明九十五周年となるので頑張りましょう。」とのご挨拶を頂きました。

選句　主宰は多選

雪欄作家十句　一般参加者五句

披講

一般選　曲淵徹雄

雪欄選　保坂翔太

主宰選　山本鬼之介

主宰詠

津軽からはるばる来たぜ寒卵
金管を磨きにみがき春を待つ

主宰選

三極（天・地・人）

天

日本橋三越天女像待春　　萬蝶

地

待春の鼓動ほのかに能登の山　　昇

人

春待つや付箋にぎやか時刻表　　律子

超特選

指切りの指ポケットに春を待つ　　喜恵
暁に妻の箸音寒卵　　道を
寒卵立てて一日の始まりぬ　　はるみ
片泊り一膳飯に寒卵　　節代
春を待つ東照宮の眠り猫　　徹平
春を待つ太極拳の受講証　　慶子
恍惚は余生のおまけ寒卵　　延昭

特選

春を待つ仮設の部屋の一間かな　　章嘉
待春の手より零るる化粧水　　由紀子
湯を弾く嬰児（みどりご）の肌春待てり　　広子
百寿の手ゆるゆると割る寒卵　　律子
春を待つ浅瀬に雑魚のきらきらと　　かつ子
溶きほぐす箸に抗ふ寒卵　　君夫
炊き出しに笑顔の絆春を待つ　　鶴城
ベビー靴つばさを閉ぢて春を待つ　　佐江
生き延びて恋の春待つ獣たち　　久夫
春を待つ樹々は天空仰ぎをり　　久美子
山里の風の匂ひに春を待つ　　宣子
学舎の木々は黙して春を待つ　　詠子

今年こそ行きたき吉野春を待つ　美智枝
待春の牛が土壁舐めてゐる　君夫
春待つやふふふと笑ふ眠れる児　京子
待春や耳立てて聞く風の音　節代

普通選

春待つや杖つく母と並木道　みどり
和顔施の粥に落とした寒たまご　貞代
寒卵母の享年越え生きむ　千祐
寒卵蕉翁旅に食せしや　鶴城
願はくはぴんぴんころり寒卵　佐江
待春の潮の香匂ふ隅田川　水尾
寒たまご稚ころころとよく太る　義子
NHKの君が代に和し春を待つ　月を
かたかたと黒き薬罐や寒卵　久夫
転がせば戻る実験寒卵　徹平
寒卵割ればつやつや朝ごはん　久美子
待つ母と胎蹴る吾子へ寒卵　茂子
白銀に埋もるる校舎春を待つ　翔太
待春の杣にぽつぽつ人獣　卓郎
春待つや白衣に杖と納経帳　更穂
待春の木鋏刻む音ちやちやちや　きいち
しやうゆ一滴そのまま喉へ寒卵　和葉
春待つや素数の列に在る秩序　山菜
髭剃りて春待つ街へ帽子屋へ　暦文
春待つや編み上げらるる糸と時　真理
自販機に中の品見せ春を待つ　松本光子
はつらつと黄身匂ひ立つ寒卵　でん治
寒卵指紋の痩せし五指の艶　徹雄
待春の思ひひとしほ八十路の身　美紗子
薄雲の世界図ちぎれ春を待つ　英子
寒卵落とし盛り付け決まりをり　宣子
床上げの朝粥に割る寒卵　昇
蜂蜜の壜逆さまに春を待つ　下川光子
安寧の世界祈りて春を待つ　多美子
宿酔や出しなに啜る寒卵　修
寒たまご朝餉に灯す黄味二つ　喜恵
籾殻をそつと掻き分け寒卵　章嘉
白飯をすこし窪ませ寒卵　由紀子
寒卵割らるる音に目覚む朝　詠子
舅より妊婦へ届く寒卵　美智枝
根詰りの花樹鉢替へや春を待つ　風舎
産みたての鼓動手に置く寒卵　マスミ
尖る子の片手で割りし寒卵　和子
寒卵まだかまだなの炊飯器　慶子
矍鑠や「あきたこまち」に寒卵　風子
沈金の輪島塗椀寒卵　恵子
罹災民に届けたしこの寒卵　ひさの
春を待つ色取り取りのランドセル　延昭
幼の手包むぬくもり寒卵　公子
隅田川いつものやうに春を待つ　道を
平飼ひの未だ温み持つ寒卵　広子
寒卵蔵ひ忘れし卯の小鉢　ひろこ
街路樹の傷二つ三つ春待てり　はるみ
掌にとれば肌ざらざらと寒卵　かつ子
たなごころに鎮座するごと寒卵　京子
寒卵かつこむ鳶職三代目　萬蝶

一般選、雪欄選、主宰選終了後、主宰の講評を頂き、天地人の三極には色紙、超特選には短冊が授与され、高得点者には水明より記念品が贈られた。

高得点者

一位　蛭田律子
二位　境延昭
三位　石井喜恵
四位　田中章嘉
五位　横山君夫
六位　森下山菜
七位　五明昇
八位　矢作水尾

閉会の挨拶は運営幹事長の網野月を氏により行われ、本大会は定刻を少し回った午後四時四十分に無事に終了致しました。

水明例会

第一例会（浦和）

茂木和子
小林京子 報

松過の路地の祠にあぶらあげ　卓郎
組み分けは紅白とする羽根日和　拓真
松過ぎの鱗のはぬる魚市場　喜恵
松過ぎや雲足はやき暮の街　由紀子
松明けの港出てゆく郵便船　順子
松過やなほ威厳ある長屋門　治子
組みたる楷崩れて更に燃え上がり　京子

――以上特選

松過や冷めゆく色のビルディング　拓真
路地裏や組んづ解れつ雪合戦　喜恵
松過やのつそりと来る隣猫　由紀子
松過ぎの書肆で立読む新刊書　延昭
赤組を応援する奴初笑ひ　節代
松過ぎの小鍋にほぐす残り膳　マスミ
松過やパンを齧りつ出勤す　はるみ
松過や地震見舞ふ妻加賀訛　徹平
松明けに食傷ぎみの清掃車　卓郎
松過ぎてひとり始末す残り物　千祐
松過の一日早くも普段服　チアキ
ベンチ組背にも足にも紙懐炉　稀香
松過ぎて未だ黒豆きんとんも　和葉
松過ぎぬ夜闇の地震の剥き出しに　舎人
鳶職の組合ここぞ出初式　京子
紐を組む色重ねつつ春を待つ　順子
松過の玄関まだまだ元気　光子
腕組みてフォークダンスや冬うらら　和子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

降り続く雪を飽きずに露天風呂　敏江
竹馬の揺れてやうやく二歩三歩　〃
降る雪に道の消さるる下山かな　峰雄
街灯の照らす三角小雪舞ふ　いちい
雪になる気配くぐもる街の音　みどり
一掻きの腰の痛みや雪降ろし　鶴城

――以上特選

つぶやきに似て一輪の梅咲きぬ　竺仙
まつ赤なほつぺ竹馬名人紙芝居　士史
昨今の子ら竹馬を知らざりき　りこ
傘閉づるときの重たき牡丹雪　峰雄
元旦をひつくり返す大地震　敏江
竹馬や父さんわたしに代わつてよ　いちい
地震の地に雪降り続く今日あした　みどり
竹馬や紅顔もはや老眼に　鶴城

第三・若松合同例会（東京）

五明昇
正木萬蝶 報

闇汁によもや烏賊墨とは儘よ　佐江
闇汁や武家の裔また公家の筋　理恵
闇汁に乗り出す膝と退く膝　マスミ
闇汁やひとり見知らぬをとこをり　千春
大岡裁きめく闇汁の鍋奉行　昇

――以上特選

闇鍋や草鞋を入れた奴のゐて　月を
いざ闇鍋「正露丸」こそ忘るまじ　佐江
闇汁の何かは知らず啜るなり　雅夫
闇汁会決め手は主の為人　康世
ちぐはぐな匂ひ沸き立ち闇汁会　徹雄
初句会後の楽しみ酒宴かな　星歩
山形も博多も入る闇鍋会　はるみ
闇鍋やZ世代の新社員　鶴城
今流と名を変へ闇鍋トマト浮く　千祐
別品のするりと逃ぐる闇夜汁　京子
妖艶な女将のしかけ闇汁食ふ　慶子
闇鍋の闇にためらふ箸蓮華　千春
サイレンの近づいてくる闇汁会　ひろこ
知らぬ間にひとり消えをり闇汁会　理恵
闇鍋や箸でまさぐる深海魚　稀香
闇汁やこつそり垂らす惚れ薬　順子

闇汁会座敷童の気配あり　マスミ
闇鍋やくちづけよりも柔きもの　萬蝶
闇汁やもぞもぞ動く腹の虫　昇

第四例会（浦和）

石井喜恵
反町修報

疎林より曙光ひろがる淑気かな　由紀子
淑気満つ鳶旋回の港町　恵子
噴煙は太古の息吹淑気満つ　玲子
禅林に淑気揺るがす魚鼓の音　昇
琴の音や淑気満ちたる「春の海」　修
妻もまた下町育ち福寿草　喜恵
鳴き龍の残響の廊淑気満つ　〃

――以上特選

投込寺に浄土の光福寿草　マスミ
雪を割り光る黄色や福寿草　行雄
羽織りの紐のかたき結びにある淑気　延昭
福寿草ぢぢの手握り眠る吾子　暦文
暁光の机を掩ふ淑気かな　でん治
楼門に八咫烏かな淑気満つ　翔太
ときめきの余生満喫福寿草　修
寄せ植ゑの中のぴかいち福寿草　光子
陽をさそひ松の根方に福寿草　玲子
美しき老いでありたし福寿草　寛治
命名のこだはる字画福寿草　恵子
撮られをり猫と私と福寿草　由紀子
舞殿の巫女の緋袴淑気満つ　昇
淑気満つ手水こぼるる龍の口　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

氷上の湖心を目差し渡り初む　宣子
大鍋に伊勢海老踊る浜料理　水尾
伊勢海老や甲冑まとひ躍り出る　知子
伊勢海老や髭口ほどに物を言ふ　千祐
伊勢海老の全き赤や祝ぎの膳　佐江
恋の息吐くや煌めく氷面鏡　〃
蹲踞にひとひらの紅初氷　〃

――以上特選

髭躍る大伊勢海老に予約札　義子
氷踏む音に目醒むる別れかな　千祐
氷上や楽に合はせて美女の舞ふ　美佐尾
石塊も風も転ぶや厚氷　はるみ
初氷桶に赤い実閉ぢ込めて　知子
伊勢海老の姿に福を呼ぶ心地　宣子
氷面鏡みぎはは蒼き光かな　水尾
氷壁は柱状節理風わたる　玲子
木屑よりぬつと伊勢海老髭立てり　佐江

関西例会（大阪）

森本早苗報

回想や祇園小路に細雪　鬼之介
左義長の灰も吉縁魔除けとす　千津子
瑞鳥に見ゆる鴉や松の内　〃
新人の名告り晴れやか初句会　ゆら女
冬深しきれいに忘れたる吉夢　人美
寥寥とホルン流るる寒の牧　玲子
花咲爺の声なき声す冬桜　和子
探梅や髪に香りを持ち帰る　道子
初田鶴万感込めて飛び立ちぬ　きわゑ
おのづからそろふ手拍子初芝居　廸代
浜焼の牡蠣宮島へ爆ぜたがる　早苗

――以上特選

初場所や綺麗所の日本髪　ゆら女
子のくれし年玉ちらと亡夫に見せ　洋子
蒼白き御霊の炎寒の月　智恵子
妻の座に居据り四温日和なる　人美
蔵に湧く宮水祀り寒造　玲子
松籟の日影追ひつつ初詣　千津子
春隣落ちし鍋蓋はしやぎすぎ　和子
行き違ふ人の残り香探梅行　道子
遠き日の記憶ふつふつ寒牡丹　千枝子
喜寿祝ふ色紙の届く大旦　千世子
舟唄の八代亜紀逝き冬の雨　満耶子
新年会十人十色嚙み締むる　きわゑ
三婆の訪ふ大寒の水族館　廸代
初旅や踊る阿呆に成り済ます　早苗

各地句会

りそな俳句会（浦和）

元日や五年日記に「激震」と　久美子
一眼は傘寿の証し福達磨　暦文
開門の太鼓の音や淑気満つ　道を
淑気満つ走り根太き杉並木　寛治
巫女の舞ふ鈴しやんしやんと初神楽　建治郎
何人や幸多かれと初詣　京子
去年今年地震激突予兆かな　勲
まほろばの大和三山初明り　マスミ
初春の光の交差大路かな　雅夫

芽吹句会（浦和）

噴煙は太古の息吹年迎ふ　玲子
世界平和祈る百寿の初点前　富子
床の間の脚光のごと福寿草　修
冴え冴えと明星孤高誇りをり　久美子
初刷に水攻め火攻めありしこと　ひろこ
裏白のちぢれ具合も目出度くて　千重子
年たちて白銀の富士ビルの街　チアキ
筆蹟の撥ねに勢の吉書かな　道を

野菊の会（与野）

葉牡丹の大渦あまた夜の地震　美代子
松過ぎの被災地に哭くショベルカー　和子
駅伝に肩入をして三が日　清子
吾の町の初めての路地福詣　光子

雛の会（浦和）

書き置きはたつた一行寒雀　喜恵
鮪への大間の熱気心意気　公子
平凡といふ幸せを着ぶくれて　燈女
着ぶくれて駆ける階段始発ベル　輝翠
着膨れて耳まで疎くなりにけり　佐江

櫻蔭句会（浦和）

糸を編む時ゆるやかに冬日差　真理
産室の初声高し霜の朝　久美子
駅伝に糸雨降りそそぐ二日かな　美智枝
過ぎし日々みな透明に雑煮食ぶ　茂子
機初め糸かけ一打強く打つ　美子
糸とほす繕ふ布に冬ひざし　千恵
青み添へ五彩ととのふ雑煮椀　由紀子
改めて二人向き合ふ雑煮かな　行雄
四代の家族集ひて雑煮膳　多美子
生糸取る婆の手捌きちやんちやんこ　公子
海峡に糸電話引く冬の子ら　幸代

りんどう俳句会（浦和）

一筋に生きて散りたし寒椿　寛治
鳴き龍の声賜りし今朝の春　君夫
はつ春や久しきせがれとへぼ将棋　弘夫
白銀にたましひのやう寒椿　治子
寒椿活けて写経の四畳半　風子
寒椿社の裏の荒びたる　徹雄
寒椿女剣士が面一本　翔太
落ち際のくれなゐきらり寒椿　順子
初春や見沼太鼓に踊る龍　まり子
初春や秘蔵酒杯の出番なり　利子
色秘する拳ゆるむや寒椿　卓郎

和歌山水明句会（和歌山）

初凪のお台場に澄む鳶の笛　和子
ハイヒール響く地下道寒の入り　道子
ライト浴び舞ふ初雪の風情かな　千枝子
舞台からマジック・ミラー声冴ゆる　千世子
焼け跡の朝市通り雪時雨　満耶子
去年今年帰る人有り来る人有り　きわゑ
新年や氏神様の鈴清か　洋子
広前の榾火守らのコップ酒　廸代

青葉の会（浦和）

今朝もまた目覚めて独り寒卵　美紗子
真直なる初日を拝む幸せよ　真理
幸せや初日を拝む九十九里　美智枝
初春や生きてゐること幸思ふ　美子
冬の虹思はず願ふ幸せを　啓子
着ぶくれて幸せ多きランチ会　公子
寒卵黄味色違ひ味くらべ　洋子
日溜りに落葉のごとく冬の蝶　和子
寒卵両手に受けて透かしみる　輝翠

繭の会（浦和）

初富士と酒酌み交はす一人旅　寿夫
人中に花束のごと破魔矢抱く　さよ子
破魔矢持つ少女剣士の大き眉　まりこ
ストックと破魔矢挿したる赤ザック　珪子
初富士に日のあたりたる渚かな　風舎
戦ふは昨日の己破魔矢かな　伸子
初富士や白よりさらに白き富士　夕峰
初富士を拝す白寿や明日祈る　和子
初富士のその麓まで日の映り　律子
破魔矢にて疫病の神を退治せん　風子
なゐの報破魔矢を焼ぶる氏子の火　月を
初富士や葉書の文字に浮かぶ顔　鶴城
初富士や明日は箱根へ勝ちに行く　京子

あゆみの会（浦和）

嫁となる子を真中に初写真　倶子
パートごと音を調へ初稽古　重子
ミッキーと娘の二人初写真　和
皆揃ひ仲良し顔の初写真　山遊
境内に太鼓轟く初不動　啓子
初写真妻の眉毛はやや濃いめ　藻好

きざきサークル（浦和）

寒梅や読経の洩るる花頭窓　昇
寒梅に水音聞かす車井戸　光子
茶室へと伝ふ飛石寒の梅　和
寒梅やベンチにいつも同じ猫　健司
寒梅や肩を寄せあふ女坂　倶子
寒梅や杖を頼りに札所道　啓子
寒梅に誘はれ歩む試歩の杖　和枝
故郷は母ありてこそ冬の梅　和子

珊瑚の会（浦和）

手相見に小さき日溜り初天神　喜恵
探梅行ほのと一輪また二輪　マスミ
鳶の輪の景のうちなる探梅行　水尾
合格へ絵馬の押し合ふ初天神　昇
赤いおべべに鈴を鳴らせり初天神　光子
賢人の顔で杖つき初天神　恵子

そぞろ歩きは湯島のあたり初天神　史代
探梅や雑木の奥に尼僧庵　広子
梅探る足が勝手にひよいひよいと　和子
探梅や水子地蔵の七基ほど　和葉
絵手紙の墨の匂ひや初天神　かつ子
ポシェットに飴玉三つ探梅行　節代

櫟の会（浦和）

沈黙の原発見ゆる大枯野　朋子
枯野行く尾瀬の歩荷やさらに行く　裕誌
それぞれにメモ入れ手製福袋　富子
福袋中身見せますお買得　文子
落日に一瞬赤き枯野原　治子
楽しみは見えぬが花の福袋　あつ子
さあ開けむ胸の高鳴る福袋　千重子

鶴川山百合句会（町田）

室咲の花も美し銀座の夜　雄二郎
たましひの攫はれさうな日向ぼこ　史代
朝寒や小指ぶつける椅子の脚　広子
スキー靴履いてロボット歩きかな　千春
ゲレンデにゐてこそ夫の男振り　萬蝶
聖菓売るテントに隣る献血車　理恵
月命日母に一枝室の梅　美千子
ゲレンデ中とまらず響く叫び声　千壽子
誘はれて背広姿のスキーヤー　玲子

若狭水明会（若狭）

家仕舞の話などして冬木の芽　郁子
息白し姉追ひかくるランドセル　ことは
看護師の見習ひと言ふ冬木の芽　初花
搾乳の牛恙無く息白し　登美江
ジョギングの息白くして遠ざかる　祥子
白浪の湾になれ鮨忘年会　寛久
冬芽立つ兆しのありや句碑辺り　保人
孫に早やにきびの兆し冬木の芽　和風
来客を見送る夜空息白し　八重子

芙蓉句会（浦和）

面影のおぼろになりし賀状読む　税子
湯の街の湯煙白し梅一輪　仁
厳かを地震切り裂く年新た　美子

蝌蚪の会（浦和）

初夢や走り続けて出発点　ひさの
初夢や富士の姿のくつきりと　さち子
極寒の揺れ鎮まらぬ能登の国　風舎
幸ありと聞き三椏の冬木撫づ　英子
静脈の青きの寒し健診日　礼子
犬と子らくるくる回る大冬木　元美
静かなる湖畔に鳥も冬芽踏む　しるく
匕首で刺されて無傷夢はじめ　月を
初夢やこの上もなき夢の夢　鶴城
年の朝静かに起きて厨立つ　宣子

山茶花（浦和）

掛け軸に「夢」の一文字淑気満つ　マスミ
能登の地に幸ひとどけと福寿草　美江子

野ばらの会（浦和）

水鳥や川面に光遊ばせて　栄子
悴む手紅茶にぽとりブランデー　秀子
長旅を波に癒して浮寝鳥　夏江
朝日浴びぷかりぷかりと浮寝鳥　茂子
悴みてファスナーにさへ嫌はるる　みき子

水明澪つくし句会（大阪）

三が日中華そば屋のうすあかり　智恵子
表紙はぐ音もめでたや初暦　洋子
目瞑りてなほ光くる大旦　人美
女正月漫ろ歩きの小買物　ゆら女

ミモザの会（横浜）

「私卒寿よ」と声高らかに初電話　史代
右手に吾子左手に神と初詣　萬蝶
初春や鉄道唱歌響く駅　詠子
年賀状幸も一緒に届けられ　由美子
若水を母の遺せし黄のばらへ　栄子
正月の迷子放送こはるちやん　玲子
お正月祝ふ婆さま百三つ　亜弥子
買初はぶらり散歩のラムネ菓子　慶子
猿回しの猿に二歳児見下され　千春

神戸大池句会（神戸）

地震の報続くテレビや寒卵　玲子
瑠璃色に日影艶やか竜の玉　千津子
恙無く揃ふ笑顔の初句会　早苗

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

屋敷のあとに建売四戸初鴉　延昭
小さき手に小さき熊手や手締め沸く　健司
目にまぶし春着の妻の割烹着　美枝子
柚子風呂に五体の捻子がゆるびだす　倶子
機嫌よき浅間小浅間年明くる　昇

水明熊谷句会（熊谷）

冬萌や掻き分けてみる杖の先　秀子
寒見舞問うてばかりの母の文　燈女
紅の椿を描き寒見舞　栄子
冬萌やビルの谷間の不動尊　徹平
寛解のそふる一文寒見舞　卓郎
春芝居通が占めたる立見席　風子
初句会曽て立体俳句論　道を
冬萌や秩父連山こむらさき　茂子

皐月の会（浦和）

女優しやなり前にまはれば雪女郎　山菜
年の空蕎麦打ち悠悠自適かな　更穂
早梅や優雅な女歩みよる　光代
諸鳥の声静まるや冬木立　珪子
寒林を足早に抜け深呼吸　順子
寒林を抜けた先には夫婦松　紀子
早梅や皿に絵付の紅ほのか　静香
初景色出雲の空に日章旗　暦文
初景色人生かけた襷継ぐ　美佐尾
櫟の寒林探れば山親爺　きいち

たかんな俳句会（川口）

外苑や駐車の列と冬木立　謙一
冬の日や英和辞典に拡大鏡　のり子
来賓の長き祝辞を絶つ嘘　小麦
さりげなく告ぐる辞退の初電話　義子
膝進め深きお辞儀を初点前　鶴城
年新た進水式の祝辞かな　水尾
予報士の言葉に寒波乗り来る　静香

円卓の会（浦和）

理髪店のいつものレジの福寿草　京子
初晴の駅伝流るる八木節　修
通り字の「一」を「を」に変へ初句会　月を
被災地のがれきの中の福寿草　輝翠
水仙の花の彼方に水平線　翔太
福寿草妻の家系は子沢山　道を
退院の眩しき風や福寿草　静香
やがて来る季節の使ひ福寿草　亮一
真つ直ぐな道に高まる淑気かな　拓真
初晴や玻璃に細枝揺るる影　鶴城

俳句の手ほどき（岩槻）

出港は末広がりぞ漁始　水尾
待春の雅楽の調べ華燭の典　佐江
松飾る華道宗家の表門　延昭
山頂の寺の合掌初日の出　義子
歌がるた一瞬早き華奢な指　徹平
今にして華年ありしや正月来　忠男
家系図の始祖は天保着衣始　翔太
成人の日の華やかな輪賑やかに　美子
風花や天界からの散華とや　桂子
人波にのまれ浅草切山椒　幸代
新年や八十路過ぐるも青春よ　久美子
可杯（べくさづき）で亨くる年酒の無礼講　卓郎
華麗なる富士の夕日や明の春　チアキ
まゆ玉を馬頭観音にも一枝　かつ子

若楠句会（浦和）

初凪に激震走る能登の街　葉子
松取れて常のにぎはひ棒手振　風舎
賽の目の五で上がりけり絵双六　京子
めでたさも漆器も仕舞ひ松納　真由美
初凪や光の中の貨物船　直子
鮟鱇鍋五臓六腑に五つ星　鶴城
初凪や今年の牡蠣はきつと○　宏治

新樹の会（浦和）

円安の便乗値上げ年の暮　平通
試乗車に客を呼び込む飾かな　清吉
実のごとく雑木に群るる寒鴉　修
人もお前も命はひとつ寒鴉　風子
天辺に自慢たらしく寒鴉　道を
乗りのよき双子姉妹の寒さらへ　徹雄
能登の地に地震を見舞ふや寒鴉　鶴城

水明鬼石句会（鬼石）

大吉も凶も一興初御籤　和子
早朝の元気な声よ寒雀　ナヲ子
少しづつ数の減りゆく年賀状　聡子

小梅の会（浦和）

新刀を叩く鍛冶場や雪催　進
冬至湯の香に包まるる日暮かな　恵子
新品の眼鏡に替へるクリスマス　隆文
風止まずテントで作る雑煮風　隆然
空つ風武蔵の国を縦に裂き　道を

柿の木塾（浦和）

餅花や木彫の熊の太く吼ゆ　和葉
激動の昭和遥かに寝正月　昇
屈託のなき人生や寝正月　水尾
餅花や過疎の駅舎に飾られて　章嘉
再生の刻を待つかに寝正月　かつ子
寝正月間近に故山迫りくる　恵子
床の間に家宝の槍と餅花と　節代
神棚の神が昂ぶる繭団子　和子

若枝句会（浦和）

朝市にただよふ香や野水仙　貞代
鏡餅元号のある国に生く　泰生
青空に白の矢印白鳥群　みどり
常春の岸に咲き出づ野水仙　泰子
白鳥の聲冴え渡る荒野かな　美佐子
水仙のほのかに香り深呼吸　敏江
丸むるは婆の出番ぞ鏡餅　徹雄

めだか句会（浦和）

獅子舞に嚙まれ笑顔の厄男　六弦
初東風や沼の匂ひと貸ボート　知子
初東風や日差しと仲の睦まじく　久夫
初東風や小枝の凛と天を向き　灯留
初東風や思はず祈る青き空　妙子
初東風や嘘を暴きて宥免す　月を
初東風や両手に絵馬を女学生　鶴城
獅子頭大口開けてお捻りを　はるみ
獅子舞の明日の疲れを思ひやる　三茅

若鮎句会（浦和）

老少の交る台上独楽廻し　真
三姉妹八十路過ぎての小正月　順子
初鳩のまた舞ひもどる大庇　稀香
明日あれと些少の募金冬灯　秀子
小正月仕事帰りの缶スープ　拓真
少量の七草粥で初心なる　紀子
初鳩や飛び立つ空の澄みわたり　芳春
枝わたる鳥のこゑのみ小正月　ひとみ
初鳩や平らかな世に願を懸け　貴
ふうはりと山鳩と舞ふ神楽姫　道郎
初鳩の霞んで見ゆるなゐの報　香音子
駅弁を夕食に買ふ小正月　月を
覚えなき女人（ひと）の会釈や小正月　鶴城
初鳩や飛べぬ悲しみ能登の空　喜夫

誤植訂正

二月号に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

○四五頁

正　春塵ごと家移り荷をほどきけり

誤　春塵（×）のごと家移り荷をほどきけり

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。　　主宰　山本鬼之介

［指導者］　網野月を
［作　品］　５句　［受講料］1,000円
［方　法］　①用紙自由　②住所･氏名･電話番号を明記　③84円切手を同封　④返信用封筒は不要　⑤締切なしで随時受付
［送付先］　網野月を　　電話 080－7580－0208
〒338-0012　さいたま市中央区大戸 1-31-2

水明全国大会のご案内

［と　き］　2024年6月29日（土曜日）
［ところ］　さいたま共済会館
［行　事］　かな女賞・季音賞・水明賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞の表彰
新誌友紹介。季音同人、新同人の発表。
兼題入選句の発表と表彰、講評等。

申込書、参加費、大会兼題句募集、親睦会、締切など詳細につきましては4、5月号に掲載いたします。また申し込みにつきましては5、6月号に添付の参加申込書を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。（申し込みは6月15日までにお願い致します）

水明俳句会　全国大会実行委員会

特集
働く人の俳句
相子智恵／赤松佑紀
岡田一実／桑田真琴
鈴木牛後／関　悦史
外山一機／西川火尖
西山ゆりこ／野口る理
松本てふこ／宮本佳世乃
村上鞆彦／守屋明俊

❖巻頭三句
高野ムツオ
辻内京子
依光陽子
中尾公彦
川村智香子
朧　潤

❖今月の華
森清　堯
安田のぶ子

❖俳句と短歌の10作競詠
中矢　温
道券はな

❖好評連載❖
成瀬政博　とりあえずの日々
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西　朋　俳句へのまなざし
井上泰至　俳句の詩語イメージ辞典
神作研一　てのひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
毬矢まりえ　諸家書架
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2024年4月号
3月20日発売
定価1100円（税込）
https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

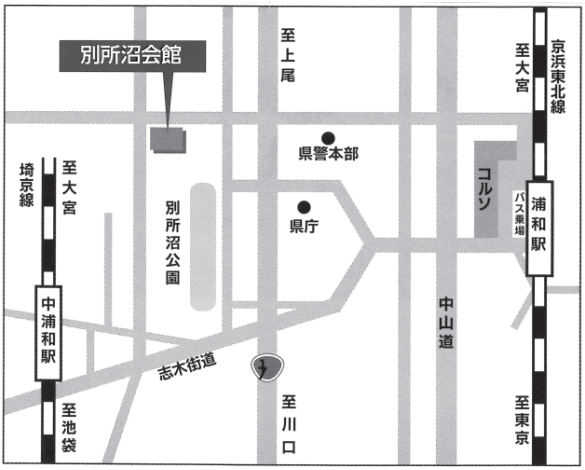
春の吟行会のご案内

［日　時］　令和６年３月30日（土）　　11時　　受付
　　12時30分　　投句締切
［会　場］　別所沼会館／１階大会議室
［投　句］　当日の嘱目２句
［投　句］　2,000円
［申　込］　３月21日（木）迄に添付の申込書に会費を添えて発行所総務部宛にお申込みください。

※会費は会場使用料に連動して決められております。昨今の句会場の確保が難しくなっております関係から、ご理解のほど宜しくお願い申し上げます。
※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。
※会場には10時から入れます。ご持参の弁当などを食べていただけます。

主担当　第１例会、第５例会

別所沼会館　〒336-0021　さいたま市南区別所４丁目14－10
TEL　048－861－5219
FAX　048－861－5267



●JR浦和駅西口から
・タクシーで約6分　・徒歩で約20分
・国際興行バス田島方面志木駅東口行
「別所沼公園」下車 徒歩1分
●JR中浦和駅下車 徒歩約10分

風　声

○**現代俳句**一月号――「列島春秋」欄
地区別現代俳句歳時記の福井県の句で　檜鼻ことは
盲目の杖に雪解け水の音

○**現代俳句**一月号――「現代俳句の風」欄
淡雪の百穴ぽかりぽかりかな　池田雅夫
富士に一礼篤農の打つ冬田かな　五明　昇
冴ゆる灯や稽古帰りの吾妻橋　染谷風子
小春日や水切り三つ五つ六つ　原田秀子
毛糸編む母の背中に昭和かな　茂木和子
寒禽葬るからくれなゐの花の樹下　大橋廸代
ひたひたと光の渚日脚のぶ　由良ゆら女

○**くぢら**（中尾公彦主宰）一月号――「受贈俳誌美術館」欄
霧の浜町江戸と覚しき常夜灯　**鬼之介**

○**幻**（西谷剛周主宰）一月号――「受贈誌拝見」欄
真つ直ぐに引けぬ白線秋惜しむ　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞代表）一月号――「受贈俳誌紹介」欄
ぬけぬけと一人三役村芝居　**鬼之介**

○**雪嶺**（石本雪鬼主宰）一・二・三月号――「受贈誌」欄
気後れの吾を励ます青蛙　**鬼之介**
去りぎはに小節きかせて法師蟬　〃

○**太陽**（吉原文音主宰）一月号――「受贈誌御礼」欄
秋うらら古美術商の鼻眼鏡　**鬼之介**

○**玉梓**（名村早智子主宰）一・二月号――「他誌拝見」欄
ぬけぬけと一人三役村芝居　**鬼之介**

○**谺**（山本一歩主宰）一月号――「受贈誌の一句」欄
色鳥やインク濃くなるガラスペン　梅澤輝翠

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和六年一月三十一日現在―

内田恵子	9	口
菊池ひろこ	10	口
匿名	6	口
野口和子	3	口
岡野順子	30	口
高原和子	3	口
石井喜恵	5	口

―合計66口―

後記

先日、「鳥羽谷」燗酒編が届きました。表紙を繰ると、鳥羽和風氏のとびらのことば〝浦和と若狭は隣町〟の見出しが、目に入りました。

昨年の水明の二泊三日のバス旅行では、一日目と三日目は、ほぼバスに乗っていました。それが隣町とは？と思って、和風氏の記事を読ませて頂きました。すると、三月十六日に北陸新幹線が開業して、東京と敦賀をほぼ三時間で走るという。なるほど、浦和と若狭は隣町の様だとお書きになる和風氏に共感しました。新幹線が開業したら、場合によっては、若狭は日帰りでも……と思いました。

二月一日浦和コミュニティセンターで、新春俳句大会が行なわれました。午前中に「例会、句会指導者および幹事の会」が開かれて、同日の午後という事もあったのでしょうか、近ごろ最高の五五名の方が出席されて、とても盛況な新春俳句大会でした。

当日、主宰の天賞に輝いた正木萬蝶氏がご報告の記事をお書き下さいました。ご覧下さい。

水明二月号から、「季音雪月花」と「水明集」の投句用紙が少し変わりました。それに伴って、それぞれに「投句用紙が変わりました」という頁を挿入しました。

大部分の方は、わかっていらっしゃると思いますが、鉛筆書きの方等が時にいらっしゃいます。

投句用紙が揃っていないと選句時間にも影響するようですので、ご協力お願いします。

二月末日で新珠賞の募集が終了しました。いよいよこれから、主宰と関係者の選が行なわれます。発表までしばらくお待ちください。

巻末に「春の吟行会」の申込書を添付しました。久し振りに公園を歩いて句を作りましょう。皆様のご参加お待ちしています。（節代）

今月のはてな？

羽咋（はくい）〈能登地方の市名〉　11頁
擬蟷螂（かまきりもどき）　15〃
三鞭酒（シャンパン）　19〃
風巻（しまき）　21〃
直路（じきろ）　35〃
二薺（ふたなずな）
沈菜（キムチ）　60
遠敷（おにゅう）〈若狭の地名〉　67
焼（く）ぶる　69
棒手振（ぼうてふり）　70
宥免（ゆうめん）

水明発行所受付時間

（048−822−4741）

曜日：（月・火・水・木・金）

時間：12時半〜午後4時半

（土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和六年三月号
通巻一一二二号
令和六年三月一日発行

発行所　水明俳句会
〒330-0064　さいたま市浦和区岸町四−一〇−二
電話　048−822−四七四一

ホームページ
「水明俳句会」で検索

誌代　半年分　六、〇〇〇円
一年分　一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分　二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分　三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇−〇−一九二三九三

発行人　山本鬼之介
印刷所　中央美版

令和6年「春の吟行会」参加申込書

〈申込締切　３月21日(木)〉

春の吟行会３月30日㈯	会費　￥2,000円	出席します

※「出席します」を〇で囲んでください。

※受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。
2024 年 3 月　　日

住所	〒		
氏名		電話	―　　―

（申込書送付先：〒330－0064　さいたま市浦和区岸町4－10－21）
水明俳句会

［緊急連絡先電話番号］

電話番号	―　　―
氏　　名	

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。緊急時のみに使用し他の用途には使用いたしません。

きりとりせん

季音投句用紙が変わりました

記入上の注意と記入の仕方

投句用紙の記入の仕方などについて、かねてより指導やお願いをして参りましたが、まだまだ徹底ができていないようです。改めて提出についての注意事項をお知らせ致しますので、十分ご理解の上投句をお願い致します。

雪・月・花のいずれかを赤〇で囲ってください

線に沿ってきちんと切り取って下さい

会の長寿祝い等の参考にさせていただきます

俳号又は本名

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　　歳

季音　雪・月・花

五月号　三月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

題

氏名（俳号）

き・り・と・り・せ・ん

水明集の投句用紙が変わりました

記入上の注意と記入の仕方

投句用紙の記入の仕方などについて、かねてより指導やお願いをして参りましたが、まだまだ徹底ができていないようです。改めて提出についての注意事項をお知らせ致しますので、十分ご理解の上投句をお願い致します。

線に沿ってきちんと切り取って下さい

水明集　五月号　二月二十五日締切

き・り・と・り・せ・ん

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

鉛筆書き不可

訂正は修正液等で丁寧に

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）090－1234－5678

氏名（本名）

年齢　歳

都・市・町名　さいたま　都・市・町

氏名（俳号）　姓　名

都・市・町の該当居住地を〇で囲って下さい

俳号又は本名

会の長寿祝い等の参考にさせていただきます

最上部の桝から間を開けずに楷書で丁寧にお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先（電話番号）

氏名（本名）

年齢　歳

水明集

六月号　三月二十五日締切

都・市・町名	氏　名（俳　号）
都市町	

きりとりせん

きりとりせん

山紫集

令和六年
五月号　三月二十五日締切

二月の兼題　「帰雁」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

氏名（俳号）

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明通信

きりとりせん

都市又は府県名	姓並びに俳名

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

送り先　〒三三〇-〇〇六四　さいたま市浦和区岸町四ー十ー二一　水明発行所

新誌友紹介　下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒　－		
氏名		電話番号	－　－

通信欄（近況・感想などご自由にお書き下さい）

季音抄

山本鬼之介

鶴髪の溺るるばかり初日影　由良ゆら女
枯木立チャペルの白を衛りけり　網野月を
妻もまた下町育ち福寿草　石井喜恵
鍬の柄を挿げ替へてをり春を待つ　石山かつ子
数独であそぶ白寿や福寿草　大橋廸代
手招くは神かサタンか雪女郎　大村節代
初春や鳩は胸から歩き出す　高島寛治
松明けの港出てゆく郵便船　大場順子
新雪や朝刊来る靴の跡　松宮保人
毬のごと弾む少女や歌がるた　森川義子
蹲踞にひとひらの紅初氷　梅澤佐江
冬萌やビルの谷間の不動尊　近藤徹平
石一つ投げて家路へ冬の川　檜鼻ことは
育ててはは氷柱を舐むる朝の月　曲淵徹雄
冬銀河未来を語りあふ茶房　保坂翔太
磴のぼる一段ごとの淑気かな　横山君夫
那須の五峰が静かに揃ふ初景色　渋谷きいち
冬萌や十五の恋は仮免許　染谷風子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

月山の上に弓なる冬銀河　西幅公子
山眠る添ひ寝するかに山里も　清水桂子
伊賀晴れて紅葉吹雪に佇みぬ　池田珪子
慎ましく生まれ気ままな六花　篠﨑紀子
鰐口を「こん」とひと撞き空つ風　菅原卓郎
其の音に琵琶の調べを落葉踏む　山岸久美子
出征兵士送りし杜の帰り花　佐々木史女
嬉しきこと数へて眠る十二月　菅原真理
「考える人」見つめ考ふ冬うらら　岡田宣子
離れまで名入り提灯北時雨　小林京子
傘かしげ霙るる橋にすれ違ふ　元田亮一
古城従容供のごとくに冬の山　丸屋詠子
会長の音痴馬鹿うけ忘年会　新暦文
関八州を搦め捕りたる空つ風　飯田忠男
年用意外陣を占むる薦被り　皆川更穂
冬霞北山杉のそそり立つ　反町修
ふるさとは行きも帰りも空つ風　阿部幸代
縄のれん客と一緒に隙間風　霜多光代

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 小林京子
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜(パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町修
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈜	大橋廸代	森本早苗

水明　令和六年三月一日発行　毎月一日発行
（第九十七巻　第三号）　定価　一〇〇〇円